

共同研究 ジョン・ラーベ「日記」の異同について (五)

門山 榮作
東中野 修道

なぜラーベは十二月十三日と十四日を区別せずに書いたのか、この素朴な疑問から始まった共同研究だが、その答えは意外にも簡明であった。本書四四一頁に明らかのように、作者のラーベは両日を区別して「十四日」の小見出しをつけていたが、編者のヴィッケルトがその区別を撤廃していた。そのためヴィッケルト版 (S106) とその邦訳版 (一〇八頁) を読む限り、そこに記された出来事が十三日のことなのか十四日のことなのか、識別できなかったわけである。しかし本稿に訳出した十二月十三日から十六日のラーベの日記体風回想録『南京上空の敵機』(一九三九)をひもとけば、その判別は苦もなくなることとなった。

十二月十三日安全地帯に「市民の死体」が？

それによれば十二月十三日は「早朝から空襲……またしても爆弾が雨霰のように降ってくる」という書き出しで始まっている。

一読して日本軍の空襲かと怪訝けげんに思えたが、これは『再現南京戦』(二〇一頁)にも記したように、シナ軍の「爆撃機三機」が城内の飛行場付近に投下した数発の爆弾であった。それゆえシナ軍機の爆撃を日本軍のそれと思わせる不正確な記述であった。しかも雨霰のように安全地帯に落下してきたのではなかったから、ヴィッケルト版では削除されている。注意すべきは、このとき福知山二十一連隊第十一中隊に戦死傷者が出ていたことである。

翌十四日になっても、ダーデン記者が十二月十八日の『ニューヨーク・タイムズ』に「中国軍の統制の悪さから、火曜日(注、十四日)の昼になっても、まだ抵抗を続ける部隊がかなりあった」と書いていたように、野戦重砲兵第十四連隊の井出龍男連隊長がシナ大陸最大の軍需工場「金陵兵工廠」を視察中に迫撃砲弾を近くに見舞われ、連隊長ほか兵士三名が戦死し、将兵数名が負傷している。入城式当日の十七日になっても、「十二月十七日晴警備。小隊員中××××、××××の両名歩哨服中、敵敗残兵ノタメ手榴彈ヲナゲツケラレ負傷ス」と、会津若松六十五連隊の上等兵が陣中日記に記したように、城外の幕府山周辺ではシナ軍の襲撃が続いていた。城門陥落、すなわち平和到来、と速断するのは早計なのである。

このようにシナ軍は城内外の各地で日本軍を攻撃していた。当然であった。十一月二十八日蔣介石が「城内でも更に防衛戦が継続される」(本稿二八一頁)と回答し、勵志社司令官の黄仁霖大佐が安全地帯からの撤兵は「最後も最後、ぎりぎりの瞬間にだ。南京の市街戦が荒れ狂う時になって初めて」(同三四一頁)と十二月六日に明言していたから、市街戦こそが城門陥落後のシナ軍の戦略であった。このためシナ軍將兵は城内各地で攻撃に、

すなわち市街戦の前哨戦に、討って出ていたのである。しかも黄仁霖は「南京は最後の一人になるまで守らねばならない」(本稿三四一頁)と断言していたから、城内の安全地帯に逃げ込んだシナ軍将兵のなかに逃げ遅れた者がいたにしても大半は「最後の一兵となるまで戦う」(本稿三四九頁)という闘志を胸に秘めて、市街戦のために残っていたと見るのが当を得た見方であろう。

市街戦となれば市民に死傷者が出る。それは政治宣伝の恰好の材料となる。日本軍としては何としても未然に防がねばならなかった。

その安全地帯に日本軍が残敵掃蕩戦に入るのは十二月十四日であった。城門陥落の十三日、特に日中には、安全地帯に入ってはいなかったのである。ところがラーベは十三日に大通りの〈中山北路〉から安全地帯の東北端の〈上海路〉へと右折して安全地帯に入ったあと、そのまま〈南下〉していくと、そこで安全地帯を〈北上〉してくる日本軍部隊に遭遇したという。

我々は大いに目を凝らしながら大通り(訳注、中山北路)を慎重に走った。乱雑に散乱している手榴弾を踏むと吹っ飛ばす危険があったのだ。上海路へと曲がると市民の死体が幾つか散らばっていたが、進入してくる日本軍に向かって更に車を走らせる。(Wir biegen in die Shanghai Lu ein... und fahren nun den einrückenden Japanern entgegen.) その部隊にはドイツ語を話す医者(einem deutschsprechenden Arzt)がいて、日本軍の将軍は二日しないと来ないと我々に伝えた。(本書四三四頁)

この十三日、中、の見聞談を事実の記録とみなしてよい理由はどこにもない。安全地帯の掃蕩を担当した金沢第

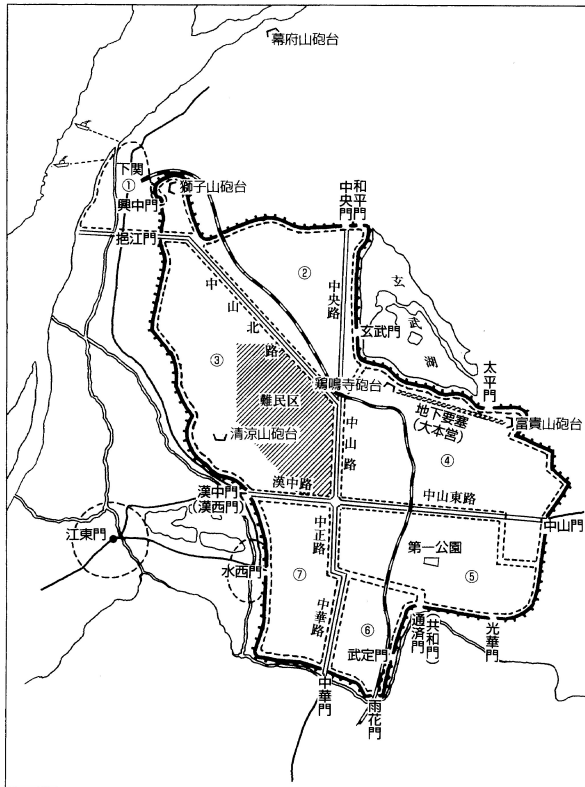
七連隊のなかに安全地帯の上海路に進入した部隊がいたとしても、早くとも十三日夜半であった。翌日の残敵掃蕩の下見のためであったから、そんな部隊にドイツ語を話す医者がいるはずもなかった。

すでに拙著『再現 南京戦』で触れたように、このとき金沢第七連隊第二中隊（第一大隊）の平本渥一等兵は中山北路を進んでいく

と、その右側に四階建て「マス」形の、表門を固く鉄格子で閉め、右側の通用門には完全武装の衛兵が二人立ち、赤々と焚き火の燃える、「外交部」が目留まった。直ちに外交部の中に入れるよう要求すると、衛兵は拳銃を向けてきたので、反射的に衛兵の胸に銃剣を押し当てると、そのうちの一人が驚いて「シーサン、シーサン」と言っ

て拳銃を下ろしたので、ただちに外交部の中に入った。すると、広い中庭では山となった書類などが次々と投げ込まれ「赤々と燃え」ていた。外交部の中に入ると通路までが負傷兵でふさがっていた。しかもほとんどが重傷

七区分された掃蕩担当地域



拙著『再現 南京戦』（草思社）195頁より転載。城内の③が金沢第七連隊の担当地域で、その南端の漢中路と中山東路の交差する地点が新街口であった。

であった。

階段の踊り場の戸棚の中に、重傷の士官が狭い所で身を丸くして寝ている。一人の重傷者が足に縋^{すが}つて水筒を握^{つか}もうとするので、傾けて(注、水筒を傾けて)飲まそうとするのに、一滴もなかった。この惨たる衝動をどうしようもない三人は、愁歎やるかたなく此処^{ここ}から退門する。(平本渥『命脈』八六頁)

重傷兵を殺害しようとしたのではなく、重傷兵に水を飲ませたくともできなかったという憐憫^{れんぴん}の情がここには発露している。後ろ髪を引かれる思いで平本一等兵ほか二人は外交部の門を出たが、赤々とたき火が燃えていたことから、これが十三日の夜であったことが分かるであろう。

十二月十三日の日中、日本軍將兵を見たというラーベの記述は虚構であった。それゆえ日本軍と遭遇する直前の路上に「市民の死体が幾つか散らばっていた」(verschiedene tote Zivilisten herumliegen)という一文もラーベの創作であったことになる。そして本書四四一頁の「私が調べた市民の死体は背中が撃たれた跡をはっきりと示していた。この人たちは逃げる時に多分後ろから撃たれたのだ」(Die Leichen der Zivilisten, welche ich untersuchte, zeigten Schuss-Spuren in Rücken auf. Die Leute sind also wahrscheinlich auf der Flucht von hinten erschossen)も、事実なら忘れられない衝動的な出来事であったはずだが、これが『敵機』(一九三九年)にはないのである。それゆえ南京占領から五年後の『爆撃』(一九四二年)において初めて加筆された作文であった、と考えるのが合理的であろう。

シナ軍将校を乗せた車が雲を霞と逃げ去った

ただラーベのために正確を期して言えば、これと類似の記録が残っていたことも付言しておかねばならない。

十二月十日ラーベが「日本軍は依然として五台山（訳注、安全地帯の西端）から高射砲で砲撃されている。高射砲はほんとうに私たちの地帯にあるのだ。これじゃ、どうしようもない」（本稿三七五頁）と記していた位置とは少し違うのだが、十二月十三日熊本第六師団の都城二十三連隊は安全地帯の西端に隣接する清涼山砲台の占領を命じられた。そこで第六中隊の橋上等兵は頑丈に構築された移動障害物等を取り除きながら、北へ北へと前進して安全地帯のところまで来たとき、不意に次の出来事に遭遇する。

難民区のところから五十メートル位先に十字路があります。そこで私は歩哨に立つて通過する自動車（みか）を鹵獲することになりました。やがて一台のツーリングが右の方から疾走してきます。

「来たな」と、はやる心を押し静めて、姿を隠して待っていますと段々近づいてまいります。四、五十メートルの近くに来たとき、飛び出して道路上で立射の姿勢をとり、自動車の前に立ち塞がりました。自動車はグーとスピードを落として停車しようとするので、案ずるより生むが易しと内心喜びつつ、少し右に寄って停車を待ちました。

ところが今まさに停止しようとした車は、自分が身をよけたその隙を利用して、急にスピードを増し、北にカーブを切ってまっしぐらに走り出してしまいました。見れば確かに支那将校が乗っている。ハッと思っただけ間に合いません。

後ろ姿を追うようにして、三、四発打ちっぱなしでしたが、自動車は雲を霞と逃げ去りました（拙編著『1

937 南京攻略戦の真実』小学館文庫、一二五―六頁)

南京陥落から約二年後の昭和十五年(一九四〇年)にシナ大陸で編集された第六師団の『転戦実話 上海南京篇』からの引用である。橋上等兵がシナ軍将校を乗せた一台のクルマを取り押さえることに失敗した所は安全地帯の大通りの上海路でも南端の近くであった。それはラーベの運転するクルマであったかも知れない。そうとすれば、確かにラーベは日本軍部隊に遭遇していたと言えようが、清涼山砲台の占領に向かう部隊に、「ドイツ語を話す医者」がいるはずもなかった。やはり「ドイツ語を話す医者」のいる部隊」と「死体が幾つか散らばっていた」の件は右の回想に確認できないため、ラーベの創作ということになる。しかもこれはラーベの回想録にはない「彼我の銃砲声」が盛んに聞こえて目の前に「迫撃砲弾」が数発炸裂するなか、橋上等兵が走り去るクルマに発砲するという一瞬の出来事であった。このような緊迫感がラーベの回想から伝わってくるであろうか。

英語を話すドイツ人「危険だ、危険だ」

城門陥落後、日本軍は『再現 南京戦』にも詳述したように、逃げる支那兵は追わず、撃ってくる敵兵とは抗戦しながら、城門から城内中心部の安全地帯へと包囲網を狭めていった。そうして確保した地点の要所要所に敵襲を警戒する哨兵を立て、不審者には歩哨に「誰何」(『再現 南京戦』二〇三頁)させ、そのうえ自軍にも眼を走らす憲兵を立て、外国大使館の警備にも就いた。

挹江門に近い英国大使館の警備は、金沢第七連隊の森茂喜少尉が命じられた。残敵掃蕩戦の始まった十二月十四日、第一小隊を率いて城内中央の第一公園を出発したが、どこに大使館があるのやら地図を見ても五里霧中で

あった。安全地帯の東端となっていた中山路を行ったところで小銃を肩に掛けた正規兵を多数捕らえたが、それとても「多過ぎて」、「不気味で」、「危険」であった。森小隊は「赤十字マークの病院」近くの十字路で、すなわち外交部付近の十字路と推測される地点で、軽機関銃を据えて援軍の到着を待った。

森小隊長は前方の様子を偵察しなければならないと思っていたところへ、うまい具合に一台の自動車が出来た。見たところ、ドイツ人が運転していた。森小隊長は手を挙げて止め、手ぶり身ぶりで車に乗せてくれ、イギリス大使館を確認したい、と言った。森小隊長だけで行くつもりであったが、伝令の示野直次上等兵は森小隊長だけを単独行動させるのは危険と、付け剣した銃を持って飛び乗った。……

だいぶ行ったところ、何と中国の第八十八師団司令部前にさしかかった。外に歩哨が立っていて、中から五、六人の兵隊が飛び出した。敗残兵ではなく、正規の完全武装の大部隊がいるではないか。相手も早、日本軍がここまで来たかとびっくりしたらしい。そうしたところ、運転のドイツ人は顔色を変えて英語で、「危険だ、危険だ」と騒いで車をＵターンさせた。もう、イギリス大使館どころでない。南京城内はまだ戦争が終わっていない状況がよく分かって、この自動車であつて良かったと思つた。（室政男編『森茂喜その人と足跡』上巻、二〇三頁～二〇四頁）

十二月十四日、正規の完全武装の大部隊が八十八師の司令部にいたというのである。すわ、日本軍出現と、飛び出してきたシナ兵も仰天したが、運転するドイツ人も顔色を変えて危険だと叫んだ。城内はまだ戦争の終わらない戦場であつたのだ。森少尉は事なきを得たが、「彼らはドイツ人が運転しているから撃たなかつた。

もし日本兵だけだったら、必ず(注、自分たち日本軍を)撃ち殺しただろう」と振り返っている。

この一触即発の危機に際して咄嗟に英語が口をついて出てきたドイツ人こそ、英語に堪能なラーベであつたろう。しかし室編『森茂喜』(平成四年)から五年後に出たラーベの回想録はこの出来事について一言も触れていない。ラーベの『南京上空の敵機』(一九三九)は創作があるうえ、その日その日の出来事についても忠実に記録していないようだ。

虚構の関口大尉来訪記

翌日の十二月十五日の記録は次の書き出しから始まっている。

午前十時、K・関口海軍少尉(訳注、関口敏造海軍大尉)の訪問を受ける。日本帝国海軍軍艦「勢多」の艦長と将校からの挨拶を委員会に伝えるためであった。

この二文のうち後者をヴィッケルト版は削除しているが、果たして海軍大尉が残敵掃蕩戦最中(二日目)の十五日にわざわざラーベに挨拶に来たであろうか。城外の港町下関に接岸した日本海軍としては、情勢把握が最優先の課題であつたはずだ。城内の情勢はどう展開しているのか、何よりも真っ先に十二月十五日午後四時頃(一二二二頁)中央飯店に入った京都第十六師団司令部を訪問して、情報収集に努めようとしたであろう。不要不急の挨拶や打ち合わせなど、喫緊の課題ではなかった。どちらかと言えば、どうでもよかったのである。しかもラーベは海軍大尉がどこに訪ねてきたのか、記していない。たとえ訪問先がどこであろうと、森少尉が英国大使館に

直行できなかつたように、道順の分からない関口大尉も訪ねて行くことはできなかつたであろう。

この疑問を解く上で、幸いなことに、関口大尉本人の回答が故板倉由明氏の質問に答える形で残っている。昭和五十八年（一九八三年）十月十六日付けの板倉氏宛ての回答は長文の手紙となっているため、筆者が適宜太字の小見出しと傍点を付しながら引用する。（なお括弧内は、注と注記がない限り、原文通りである）。

城内で会つたのはフィッチという人であつたか

先般水交会より貴殿の書簡一括送付されて参りました。小生は海軍兵学校第五十九期（昭和六年卒）で南京攻略戦時には砲艦勢多乗組の海軍大尉でありました（艦長次席）。貴殿のご書簡のご趣旨一応承服しましたが、何分四十六年前のことであり、日誌等焼却したため単に記憶により覚えていることだけをご返事いたします（七十二歳の老人の記憶です）。ご送付の略図により自分は、こんな道路を歩いて来たのか、また城内で会つた人は、フィッチという人であつたかと（Fitzroyと覚えたつもりですが）初めて教えられた次第です。

正直な所を申しますと、「南京大虐殺」という事実すら終戦後極東軍事裁判で問題になって初めて知りました。「南京江岸における大量処刑」なる事実は、少なくとも当時海軍側（特に南京市に最も近く停泊していたわが勢多）では目撃しておりません。

十二月十二日午後下関碼頭に接岸

当時軍艦勢多は第十一戦隊（司令官近藤英次郎海軍少将、旗艦安宅、当時南京下流にあり、全作戦指揮中）に属し、前進部隊の一艦として、十二月十二日午後僚艦数隻とともに、南京進撃の先陣を承り、敵の施設した機雷を除去しつつ下関碼頭（注、埠頭）に接近した所、同碼頭及び江岸には支那正規軍（武装兵）が蝟集して

おり、南京対岸（浦口方面）へ逃げるべく僚艦を待っていた様子でした。南京上流で U. S. S. Panay 号事件が起こったのもちょうどこの頃と思います。

下関碼頭の支那軍は大混乱に

下関碼頭では、わが勢多が近づきますと、敵兵は自分たちを収容に来た味方の軍艦と思つたらしく、銃をあげて万歳らしい歓声をあげておりましたが、当方が八糶砲及び七、七耗機銃を撃ち出しますと、初めて日本軍艦と気づいたらしく、勇敢にも小銃で反撃する者、銃を捨てて大慌てで上流方面に逃走する者、又わが射撃に撃たれて江中に（注、揚子江に）転落する者等、大混乱を生じました。碼頭附近に集まっていた敵兵は約二、三百名かと思えます。その光景は今でも眼底に鮮明に残っております。わが勢多は、附近に敵兵が全く皆無となったのを確認して碼頭に横付けしました。

降伏の意思表示は皆無

このとき私が艦橋から見えておりました限り、碼頭及び江岸に無秩序に集合した敵軍には、白旗を掲げたり、又は両手を挙げて降服の表示を行った者は皆無でありました。或る者はわが艦に向け発砲抵抗し、他は混乱の内、上流に向け江岸を走り去り、やがて附近には敵兵は一名も見当たらなくなったことであり、（もつともたとえ降服の意を示す者が多数あつても、一名でも発砲抵抗する敵兵がある限り、わが方としては、陸上と、数百メートル離れたフネとの間のことですから、攻撃に出る以外ほかはなかつたわけです）。僚艦数隻（砲艦保津を含む）はこの間更に数キロ上流に進み停泊し、小舟筏等で対岸に渡るべく行動中の敵を、射撃しておりました。

艦長から城内偵察の命令は十四日か

南京陥落が正式に公表されたのは翌十三日です。十三日の夕刻と思いますが、陸軍大佐の率いる将校の団がわが勢多に來られ、下関碼頭附近の陸上に停泊場司令部を設置する旨を告げられました。これが南京地区における陸海の接触の最初ではないかと思ひます。

小生の南京城内への行動は貴殿のご来信の通りと思ひます。(但し私は十二月十四日と覚えておりますが) 目的は、ご書簡にあるような「安全区、国際委員会にて、外国人記者の上海還送の打ち合わせ」等ではありませぬ。第一、このような対外的外交交渉事務は、当然支那方面海軍最高司令部たる第三艦隊(旗艦出雲、上海停泊中、司令官長谷川清中将) 又は少なくとも第一線にある我々砲艦群を直率する第十一戦隊司令部(安宅) より渉外担当參謀又は当該職員が飛來して(注、飛んで來て) 折衝に当たるべきであり、又勢多が地理的条件よりその命令を受けたとしても、詳細な指示があつたはずで、小生は同艦通信長の職務を兼ねて執つておりましたので、重要電報にはみな眼を通していたわけですが、そのような指示があつた覚えはありません。小生の判断では、艦長寺崎隆治少佐が自発的に南京城内の状況を偵察し、上級司令部に報告の要ありと認め、次席將校たる小生にその偵察(任務) を命じた次第です。

英語の発音からアメリカ人と判断

南京城内は、わが軍占領直後「非武装地区」と協定が結ばれ、城内から日支両軍は撤退したとの情報あり(出所不明)、小生もそれゆゑ武装警護兵も伴わず、軍刀一本ブラ下げたままで、単独トコトコ徒歩で城内に向かつて次第です。今から考えれば随分無茶な話でしたが、小生の行動はご送付の略図の通りと思ひます。当時英国は第三国といえども親支反日的でありましたので、ユニオンジャックの旗の出ている所は敬遠して星条旗の掲

げてある建物（図では鼓樓病院）をのぞいたところ年配の米国人（英語の発音で米人とすぐ分かりました）が出て来たので、城内の様子を訊ねた次第です。

この人がフィッチ氏だったのでしよう。私は自分の身分姓名を名乗ったのですが、先方は自分は Fitzroy で *Amembassy* の者だと、言つたような気がします。

フィッチ氏「治安組織が崩壊し、連絡不能で、交渉相手がいない」

彼の話を要約しますと、城内は完全に非武装化され、難民が溢れている。しかし便衣に姿をかえた支那兵も潜入していることは事実である。難民の処理、治安の維持にかんしては米英等第三国が斡旋して日本軍当局と交渉中であるが、支那側は警備軍司令官唐將軍 (Gen. Tang Sheng Chih) が南京を早期放棄したため治安組織が崩壊し、連絡不能で、交渉相手がいない。城内の様子はご覧の通り、*confusion* (注、混乱) が続いており、日本軍将校の貴官 (関口) が単独この地に留まることは極めて危険と思う。「時に乗り物は何で来たか」と質問するので、下関 *Pier* (注、下関埠頭) から歩いて来たと言つと、彼は「それは大変だ、車で送つてあげるから安全のため一旦軍艦に帰られたらどうか」と言う。小生は視察の任務は一応達成したものと考え、「それでは」ということで同氏の運転で挹江門附近まで送ってもらいました。彼はこの先は遠慮したいような口振りなので、小生は好意を謝して下車し、徒歩で帰艦した次第です。(上記会話は全部英語。尚、フィッチ氏の口からは第三人記者を上海に送る件にかんしては何ら話はありませんでした)。城内は少なくとも女子供でゴツタ返しており、若い男女の姿はあまり見かけませんが、時折家の窓からこちらを陰悪な眼で注視している男は明らかに敵の敗残兵と思われました。

陸軍の嚴重な検問で一時足止め

挹江門ゆうかうもんから下関碼頭かみとうに至る道路は、主要道路であるため、我が陸軍の検問所が多数あり、往来する支那人は身体及び荷物の嚴重な検査を受けておりました。小生は海軍の第一種軍装に陸戦バンドいわゆる（所謂蔣介石バンド、英語では Sam Brown Belt、現在の日本の警官の黒いバンドにほぼ同じ）を着用しており、蔣介石バンドの名の示す通り支那軍將校のものと全く同様であるため、また我が陸軍哨兵中には日本海軍將校の姿を見たことがないためか、テツキリ支那側要人と誤解され、エライことになる直前（小生の日本語が通じないはずはないと思うが）そのうち哨所本部らしいところから陸軍下士官が到着、この人は日本海軍將校の服装を知っていたので「海軍大尉殿、誠に失礼しました。お許しください」と謝られ、陸兵一名が護衛について、下関碼頭かみとうの勢多に着し、艦長に復令した次第です。

フィッチ氏「単独行動危険、至急帰途につくよう」

貴殿ご所感によれば、挹江門外で敗残兵及び市民を処刑云々とありますが、同門より碼頭に至る道路の両側に点々と支那兵の死体は散見（それほど数は多くなし）されましたが、処刑等の事実は全くありませんでした。後から考えると、小生は上司たる艦長より城内状況視察の任務を受けた以上、当然護衛兵（乗組水兵より選出）を率い、また支那語通訳を伴い、また戦闘部隊にあらざる標識として白地に「軍海本日大」（注、大日本海軍）と大書した白旗を掲げて城内に入り、米英外交機関等の責任者と十分正式に接触して状況を詳細に観察すべきであったと考えます。フィッチ氏は小生の単独行動に驚き、また小生も英会話なら若干不自由はなかったもので、これは大変と思ひ、後難を恐れて至急帰途に就くよう advice したものと思ひます。

前述の通り、私の状況視察は、貴簡によれば十二月十五日となっており、私は十四日のように覚えてお

り、ますが、勢多が数名の武装兵を出して私の指揮のもと下関付近の建物を検査し、残敵、危険物の有無を調査した日がありましたので、これが十四日であったかも知れません。何分半世紀近い過去の記憶は怪しいものです。

虐殺大量処分の事実は全乗組員目撃せず

小生の南京城内行動は、覚えている限り上記の通りであり、当時少なくとも「虐殺大量処分」なる事実は艦長以下全乗組員目撃しておりません。勢多は間もなく南京を離れ、更に上流の警備についてのですが、ご承知の通り揚子江は冬期は減水し、夏季は増水し、河川敷の幅により冬期は航路幅は半分以下になります。

小生、翌十三年十月武漢陥落前、内地勤務を命ぜられ、心ならずも漢口下流で想い出多き勢多に別れを告げ、特設砲艦で下江して下関碼頭に上陸しました。その頃は減水期にて、河川敷の所々に白骨化した人体が見え、約一年前の「江岸における悲劇」はやはりあったのかと初めて認めた次第ですが、それとも「折れ重なって」というようなものではなく、友人と艦上から「ここにも数個あるな、アッあそこにも二、三あるようだ。頭蓋骨って気味の悪いものだね」と話し合った次第です。

ご参考までに現存する関係者をご紹介します。

砲艦勢多艦長 海軍少佐 寺崎隆治……

砲艦保津乗組 海軍大尉 橋本以行……（注、住所等の記入があるため省略）

先任将校とは

一つお断りしておきたいことは、小生当時の職は「軍艦勢多乗組」であり、兵科将校として艦長次席のため一般に「先任将校」と呼ばれていました。巡洋艦以上の副長に相当し、英語では Executive Officer (XO) です。

上海に在泊中訪問使 (Board Call Officer) として米砲艦を訪問した折り「エックスオー」と言われ、その略語を知らなかったため恥をかきました。当時の制度としては(今でも同様)個艦には参謀という職はありません。

参謀は戦隊艦隊司令部職員中、特に中央から指定された特定少数の参謀であり、服装も右肩から金モールの飾緒(注、参謀しょくちよ、海軍ではかざりお)を下げた、海軍士官懂れの職でありました。ただし英語の staff の意味は後半で、日本語で言う幹部職員を意味しますので、軍事専門家にあらざるフィッチ氏としては staff と思ったのは当然であり、それを半可通の translator が参謀と訳したものと思います。米陸軍に Staff Sergeant という階級がありますが、これは旧陸軍の軍曹に相当するものであります。(以下省略)

傍点以外においても貴重な、海軍将校(当時)の回想であった。およそ半世紀後の回想ながら、陥落当初の下関と城内の雰囲気が生き生きと伝わってくるが、残念なことに、板倉氏の遺著『本当はこうだった南京事件』(平成十一年)には収録されていないため、ここにはほぼ全文を引用した次第である。

一読して明らかのように、関口大尉は艦長から城内の状況を「偵察」してくるよう命じられていた。ラーベ委員長への挨拶ではなかった。城内で偶々会った人物もラーベではなくフィッチ師であった。ラーベを訪問した事実はなかったのである。それゆえラーベの関口大尉来訪記は作文であったことになる。

こう見てみると、果たしてラーベは福田篤泰と会っていたのかという疑問も湧いてくる。そう思って「異同」を注意深く見てみると、十二月十五日の件の「我々は昨日、十二月十四日に、日本軍指揮官と連絡が取れなかったので、武装解除したシナ軍兵士の問題を明らかにするため、福田氏に次の手紙を渡した」(本書四六二頁、邦訳版一二二頁)という一文も『敵機』にはなく、その五年後の『爆撃』において初めて加筆された一文であった。

その福田氏に渡したという手紙とは、十二月十五日付け南京安全地帯国際委員会の「拝啓 (Dear Sir) 南京安全地帯国際委員会は武器を投げ捨てた兵士たちの運命に実に狼狽しております」(本書四六三頁)で始まる書簡であるが、この書簡を渡すために福田氏に会っていたのであれば、その事実を一九三九年の『敵機』になぜ書かなかったのであろうか。その日その日の忠実な記録であったのならば、かかる重要な事実を書き忘れたとは考えられない。後日の加筆、創作、と考えるのが順当であろう。

その翌日の十二月十六日付け福田篤泰宛て国際委員会の書簡にしても、「拝啓 昨日(訳注、十五日)正午あなた方と一緒に交通銀行で会見した時に、貴軍の少佐の方がご指摘のように、城内をできるだけ早く正常な生活にもどすことが得策であります」という書き出しで始まっているが、果たして陸軍少佐が残敵掃蕩戦最中の十五日に何の目的でラーベに会いに交通銀行まで足を運んだのであろうか。陸軍少佐、大使館の福田篤泰、岡崎勝男、特務機関のK・キクチにとって国際委員会と緊急に接触する必要性はなかった。城内の状況把握こそが最優先事項であつたらう。交通銀行の会見にしても検証が必要となつてこよう。

中山門(東門)と漢中門(西門)を結ぶ線の北側地域、すなわち安全地帯を含む城内北半分を担当区域とする〈京都第十六師団〉の司令部は、すでに述べたように十二月十五日の十六時頃に〈中央飯店〉に入っていた。

南半分を担当した〈第十軍〉の司令部は畝本『真相・南京事件』(九二頁)によれば十四日正午過ぎ新街口の〈上海儲備銀行〉に入っていた。

中華門(南門)から漢中路と漢中門を結ぶ区域を担当した〈熊本第六師団〉の司令部は『南京作戦の真相——熊本第六師団戦記』(二二七頁)によれば〈中華門内側〉にあった。

南京の東の湯水鎮で十二月十三日夜敗走する敵軍に急襲された〈中支那派遣軍〉の司令部は十二月十七日に

〈首都飯店〉に入った。

ラルフ・ウォードの『英文新南京指南』(A Day or More in Nanking, p.9) によれば、確かに交通銀行は銀行街(the Banking Circle)の新街口にあったが、しかし日本軍司令部は以上見てきたように新街口にはなかったのである。南京に長く住むラーベが銀行を間違えたはずもなかったから、日本軍少佐は交通銀行の日本軍司令部に來なかつたことになろう。もしラーベが「少佐」や「原田將軍」「指揮官たち」(Kommandanten)に会つていたのであれば、必ずやその人たちから上層部に報告がなされていたであらうから、その報告が第十六師団長や上海派遣軍參謀長などの陣中日誌に記されていて当然であつたが、それも無い。この会見にしてもラーベの創作であつたようだ。

二人のラーベがいた

すでに見たように、フィッチ師が関口大尉に、「唐將軍が南京を早期放棄したため治安組織が崩壊し、連絡不能で、交渉相手がい無い」と語つたことは重要な陥落当初の実情であつた。ラーベも十一月二十八日に「ここには行政官は一人も残らない」(本稿二八二頁)と嘆いていたように、南京政府の全職員が城門陥落の約一か月前に南京から撤退していたため、治安組織も行政組織も存在せず、南京は無政府状態にあつた。フィッチ師が言うように「交渉相手がい無い」は**ず**であつたが、突如として**あつて**新手の交渉相手が日本軍の前に**た**ちはだかつてきた。

南京市当局の馬市長は事態急変のため、市政府の殆ど全ての機能を国際委員会に委託した。警察、必需施設類の管理、消防、住居規制、食糧供給、衛生などである。その結果、十二月十三日月曜日正午、日本軍が勝利者

として本市に入城した時、本市において機能していた行政組織は唯一つ、我々の委員会だけであった。(傍点筆者、本書四二九頁)

果たしてそうだったであろうか。十二月一日、馬市長は、「安全(非戦闘員)地帯の監理者と馬市長と龍大佐との会合の記録」(本稿三二九頁)が記していたように、「提案された市民地帯(Civilian Zone)において住居と米の配給にかんする活動をおこなう全権を委員会に与えた」(傍点筆者)のであって、それ以上でもそれ以下でもなかった。右のように国際委員会が「警察、必需施設類の管理、消防、住居規制、食糧供給、衛生など」の権限を委譲されたと言うのは、虚構の権限拡大であった。「住居と米」の配給権を委譲されただけの南京安全地帯国際委員会は「行政組織」ではなかったのである。

そもそも国際委員会が自己の存在理由とする安全地帯は名実ともに安全地帯であったのか、そこがここで改めて問われねばならない。

つねづね指摘してきたように安全地帯は非武装中立地帯であった。だからこそラーベ委員長は「十二月四日我々は最大の障害を抱えている。軍隊を避難民地帯の地域から追い出すことだ」(本稿三二二頁)と頭を抱えていた。蒋介石や黄仁霖が市街戦を主張するや、ラーベは十二月七日「目下市街戦のための最後の防衛準備がなされている」(同三四九頁)と述べて、「市街戦は甚だしい迷惑行為、無慈悲な大量殺人だ!」(同三四二頁)、「恐ろしい大量殺戮になろう」(同三七五頁)とショックを隠せないでいた。そこには、「全軍事施設と全武装兵がこの地域の外に出たことを見届けるまでは安全地帯が有効になったと宣言できない」(同三三一頁)と苦悩するラーベ委員長が確かにいたのである。

ところが、これもすでに指摘したように、十二月十二日、城門陥落数時間前のこと、ラーベは「午後八時ちよつと前、龍と周が現れて、私の家に保護を求め、許してくれと言う。私は同意した」（同三九八頁）と、迷うことなく高級将校の保護を快諾していた。城門陥落の十二月十三日には「難民区は難民のためにある。残念ながら、兵士を保護する力は難民区にはない」（本書四三五頁）と公示しながら、その一方で「我々の本部前はぞつとするほどの兵士たちの人だからだ。彼らが安全地帯に逃げ込めるよう我々の手で武装解除する」（本書四三五頁）*Vor unserem Hauptquartier ist ein fruchtbares Gedränge von Soldaten, die sich von uns entwaffnen lassen, um in der Safety Zone unterzukriechen.*）と記している。破線部分は一九四二年の『爆撃』で加筆された部分だが、彼らが「逃げ込める」よう「転がり込める」（*unterkriechen*）よう努めたとはラーベの本心の自然な発露であつたらう。安全地帯に逃げ込んだ将兵は野宿したわけではないから、安全地帯のどこかで保護されていたことになる。

そこには、迷うことなくシナ兵を逃がして保護するラーベ委員長がいた。ということは、それが当初からの予定通りの確信犯的行動であつたことを意味する。言うまでもなく、敵兵を匿うという行為は（銃撃戦が散発し折砲弾も落下する戦場にあつては）重大な結果を伴う背信行為であつた。そのことをラーベはつねに意識していたであろうが、日本軍からすると東京のアメリカ大使館付き武官キャーボット・コーヴィルがいみじくも指摘したように（ラーベ委員長の敵兵逃亡援助のお陰で）シナ兵が安全地帯を尊重せず多くは軍服を脱ぎ捨ててそこに潜伏したことが重大な問題となつた。軍服を脱ぎ捨てた兵士はラーベが言うような「元兵士」「避難民」（本書四六六頁）ではなく、九・一一直後の二〇〇二年一月にドナルド・ラムズフェルド国防長官が述べたように、「ジュネーブ条約の定める如何なる権利も有しない」、戦時捕虜（POW）になりえない不法戦闘員であつた。それが

南京のシナ軍将兵であった。無論、裁判を受ける権利もなかった。これを不法戦闘員という言葉ではなく今日の分かり易い言葉に言えば、安全地帯は武器を隠し持ったテロリスト予備軍のための危険地帯となったのである。万が一にも市民に扮したシナ軍将兵が暴徒となって武装蜂起したり狙撃に及べば、市民もまた巻き添えをくうことは必至であった。市民の不安の種でもあったから、日本軍としては降伏してこない城内のシナ軍を掃蕩する必要が生じたのである。

ともあれ、このように、十二月十二日の夜を境にして、二人のラーベがいた。それまでは安全地帯を非武装中立地帯だと言うラーベと、それ以後は安全地帯にシナ軍将兵を進んで匿^{かくま}うもう一人のラーベがいたのである。

シナ軍の市街戦を防止した日本軍の残敵掃蕩戦

安全地帯に入って残敵掃蕩戦を担当したのはすでに述べたように金沢第七連隊のみであった。金沢第七連隊第二中隊（第一大隊）の井家又^{いのいえ}一上等兵は十二月十五日午前八時に整列して、中山路を進んで安全地帯に入り、午後四時まで残敵掃蕩をおこない、第二中隊は「四十余名の敗残兵」を処刑している。

その間の往復において井家上等兵が目にしたのは、ラーベの言うような「乱雑に散乱している手榴弾」ではなく、どこまでも続くシナ軍将兵の脱ぎ捨てた軍服であった。市街戦に備えて道路とか広場に設けられた銃眼のある公共掩蓋壕であった。警察隊のいかめしい警備であった。巡警が辻々の要所に貼り歩いた日本軍の布告文であった。九人のシナ兵が堂々と「避難民九名居住宅」と掲げている外人の家屋であった。外国人の家屋や避難民の家屋に掲げられた即席の日の丸の旗であった。そして路上の露店であった。難民が食料品を売ったり、散髪をやったり、立ち食いをしたりと賑わう「人の鈴なり」（『南京戦史資料集』I三六九頁）、これが城門陥落から二

日目の十二月十五日のことであった。

外国の建物には、憲兵隊の印が押印された「大使館職員の建物にして無断立入厳禁」の貼り紙がされて、日本の国旗の立つ家々には留守を頼まれた支那人が住み、陽気な歌声も聞こえた。……

街の辻々に少量の品を並べた出店がズラリと並ぶ。野菜、揚げ物、万頭、古着を並べた店が多く、散髪屋に靴直しなども居て、どの店もはやつている。銀色の大きなボタンの制服を着た男が、愛嬌のある挙手の敬礼をした。自警団か消防手だろう。行き交う難民には笑顔が多く、惨たる街の中に小さな平和を感じた。(傍点筆者)

掃蕩戦最終日の十二月十六日、残敵との死闘に加えて小さな平和の到来についても、金沢第七連隊本部通信班の小西與三松^{よさまつ}伍長は『陣中日記——上海から南京へ』（私家版、平成六年、二三八頁、二四〇頁）に右のように記している。

このような陣中日記の記録から三つのことが指摘できよう。残敵掃蕩戦はすでに述べたようにシナ軍との銃弾が飛び交う戦場の城内でシナ兵にたいする摘発と処刑を不可避としたが、そのようにしてシナ軍を制圧したことがその後の市街戦を封じることになった。その結果、「南京の防衛軍の唐將軍は兵士も市民も容赦なく（訳注、市街戦により）犠牲にするつもりではないか」（本稿三五六頁）というラーベの懸念は杞憂となり、市民に危害を及ぼさない日本軍の出現が市民には大きな安堵感を与えて、大通りには難民の露店や散髪屋などがあらわれた。行き交う難民に笑顔が多くなったのも、市民が治安回復の兆しを感じとっていたからにはかならない。

平和の攪乱者日本軍？

この、市街戦を封じて市民の間に小さな平和をもたらすことに成功した日本軍の残敵掃蕩戦について、ラーベは一言も触れていない。ラーベの日記体風回想録を読む限り、ラーベたちがシナ軍を武装解除して何ら問題のなくなった南京城内に、日本軍が進出してきたことから一転して「秩序の維持と……仕組みが壊れてしまった」(本書四三二頁)、日本軍の殺人と略奪と強姦が始まったという風に描かれている。それは伝聞に基づく記述であったが、次は十二月十六日の目撃談として記されている。

これを書いている時も、日本軍の兵士たちの拳が我が家の庭の裏戸をがんがん叩いている。ボーイが開けないから、この人たちの頭が塀の上に現れる。私が携帯サーチライトを手を飛び出すと、こっそりと大急ぎで逃げる。正門を開けて、跡を追うのだが、もう三日間もどぶに死体が幾つも横たわる照明のない暗い路地へと消えていくのだ。(本書四七二頁)

心理学の実験によれば、「人は自分と人種的に同じ人種に属する人の顔の方を正しく識別する」ことが、繰り返し確認されている。同じ人種間の顔は正しく識別されるが、「異人種間の識別」は困難なのである。¹⁾このためアジア人には相手がドイツ人かイギリス人かの区別が困難のように、ヨーロッパ人にもシナ人か日本人かの判別は難しくなる。それどころか、私たち日本人にも相手が日本人か中国人か韓国人か台湾人かモンゴル人かの識別は、決して容易ではない。しかもこれは夜であった。日本軍の兵士か、シナ軍の兵士か、ラーベに識別は不可能であったと考えるのが順当であろう。

それでも果たして日本軍將兵が夜に徘徊したのであるうか。破線を付した「日本軍の」は一九三九年の『敵機』にはなかった言葉で、一九四二年の『爆撃』で初めて加筆されている。しかも夜間外出禁止令が日本軍將兵には出ていた。そのうえ朝夕の点呼もおこなわれていた。そうでなくてもフィッチ師が言うように「単独行動」は日中でも危険であった。夜間ともなれば、照明のない見知らぬ街の路地に出ることは帰路の道順を考えれば危険極まりなかったであろう。「兵士たち」がこっそりと大急ぎで暗い路地へと消えていくとあつては、これは勝手知つたるシナ兵の攪乱かくらん工作であつたと考えるのが合理的であろう。ラーベがそれに攪乱され、日本軍の仕業と思ひ込まされた、と見るのがよい。

ラーベはシナ軍を武装解除したのか

ラーベはしばしばシナ軍を武装解除したと述べている。果たして武装解除したのであるうか。そもそも武装解除とは何なのか。

その部隊にはドイツ語を話す医者が出て、日本軍の將軍は二日しないと来ないと我々に伝えた。日本軍は新街口を通過して北へと（訳注、中山北路を）進軍するので、我々（訳注、三人）は彼らを追い越すため協道を幾つか走り抜けて行つた。そうして三部隊を武装解除して総勢およそ六百のシナ兵を救つた。なかには武器を捨てよという我々の要求に直ぐに応じない兵士もいたが、それでも進撃してくる日本軍が遠くに見えると、結局は応じた。それからこの人たちを外交部と最高法院に収容した。

我々国際委員会のうちの二人は更に鉄道部まで車を走らせ、途中で別の一団の兵士四百人をも武装解除し

た。(本書四三五頁)

武装解除とは、敵兵が手榴弾などの武器を隠し持っていないか、容赦なく一人一人を検査したうえで、兵士と武器を分離し、それをそれぞれ自軍の管理下に置いて、初めて武装解除と言える。果たして三人または二人で一千名の兵士を武装解除できたであろうか。できたとしても、武装解除に何時間を要したであろうか。それをどこに連行したのであるうか。連行に、何時間を要したであろうか。武装解除された一千名の兵士の行列や武器の山は容易に人目につくが、それを誰が見たであろうか。武装解除された兵士はその後どこに行っただろうか。日本軍の管理下に置かれたであろうか。

ラーベたちの国際委員会がシナ軍を武装解除したと言うには、まず以上のことに答える必要があった。が、この問に答えていなかった。何よりも武器と兵士を日本軍に引き渡していなかった。すでに述べたように、ラーベはシナ軍将兵を武装解除したと称して、そして「武器を捨てて我々の地帯に逃げ込んでいた元兵士たち」を「我々の避難民」(本書四六六頁)と称して、彼らを安全地帯に逃がしては保護していた、と考えざるを得ない。

改めて言うまでもなく、軍隊は非戦闘員を攻撃せず保護しなくてはならない。他方、攻撃されずに保護されるためには、非戦闘員は敵対的行為に手をつけてはならない。もし占領軍を危険に晒す有害な行動や破壊活動やスパイ活動に出れば、占領軍は自衛のための反撃に出るであろう。それが合法であったことを、ラーベが知らなかったとは思えない。

註1、エリザベス・ロフタス『目撃者の証言』、西本武彦訳、誠信書房、一三八頁。Elizabeth F. Loftus,

Eyewitness Testimony, Massachusetts: Harvard University Press, 1979, 1996, p.136f.

十二月十三日

早朝から空襲で起こされるとはどのようにもついていない。またしても爆弾が雨霰のように降ってくる。日本軍は昨晚城門を幾つか占領しただけで、まだ城内には入って来ていない。委員会の本部に着くや十分以内に国際赤十字協会 (International Red Cross Association) を設立し、私も役員の一員として参加した。我が善良なジョン・マギーがすでに二週間も前からこの赤十字協会設立のために走り回っていたので、彼が会長になる。我々国際委員会委員のうち三人が外交部と軍政部と鉄道部の三方所に開設された軍の野戦病院にまで車で行って視察して、これらの病院の痛ましい状況について報告する。(訳注、『爆撃』では、「視察して、これらの病院の痛ましい状況を確かめる」。医者も看護スタッフも砲撃が激しくなるや皆一緒に逃げてしまい、患者は置き去りにされていた。相当数のスタッフを連れ戻したのだが、それは彼らが赤十字の大きな旗が外交部の上にはためくのを見て、勇気を取り戻したからである。旗は大急ぎで手に入れたものだった。

□添付資料 1

「以下は富澤繁信『南京安全地帯の記録』完訳と研究」、展転社、一五四頁より転載。転載に際しては富沢訳を仰ぎながら適宜改変していることをお断りしておく。」

南京日本帝国大使館

(日本大使館二等書記官福井淳氏の配慮を請う)——、訳注、別のタイプ活字で)

南京安全地帯国際委員会 寧海路五号

一九三七年十二月十七日

拝啓 (Dear Sirs)

昨日午後の岡崎勝男総領事の、「国際委員会は何らの法的地位も持っていない」との言明に対しては、我々の立場を少々説明しておくのが適切だと思う。日本当局に対して我々は何ら政治的地位を要求してはいない。しかし、十二月一日、南京市当局 (Nanking Municipality) の馬市長は事態急変のため、市政府の殆ど全ての機能を国際委員会に委託した。警察、必需施設類の管理、消防、住居規制、食糧供給、衛生などである。その結果、十二月十三日曜日正午に日本軍が勝利者として本市に入城した時、本市において機能していた行政組織は唯一つ、我々の委員会だけであった。勿論、その権限は安全地帯 (the Safety Zone) の外に及ぶものでなく、その中においても統治権を含むものではなかった。

我々は唯一つの行政組織であったし、また上海の日本当局からこの地帯 (the Zone) に兵士がおらず、軍事施設もなければ、日本軍はこの地帯を意図的に攻撃することはないとの確証を得ていたので、我々は直ちに日本軍先遣隊と接触すべく努力した。十二月十三日午後、一名の日本軍大尉が一群の兵士とともに漢中路で休息しているのを見かけた。我々はこの地帯の位置を彼に説明し、彼の地図にその印をつけた。我々は三つの赤字病院 (the three Red Cross Hospitals) についで彼に丁重に注意を促し、武装解除された兵士のことも話した。彼は分かったと肯いていたので、我々はこれで日本軍にすべてを諒解してもらったと思った。

その夜と翌日早朝、我々は十二月十四日付の書状を作成し、日本語に翻訳させた。日本帝国大使館員福田氏が貴下に伝えるであろうが、ラーベ氏、スマイス氏及びフォースター師はこの書状を提出すべく日本軍高級将

校を捜しに出かけた。我々は別々に五名の将校とも話したが、皆、翌日の最高司令官の到着を待つようにと言っていた。

翌十二月十五日の朝、我々は本部に日本帝国大使館の福田篤泰氏及び日本帝国海軍艦勢多の艦長と士官たちの名刺を持った関口氏の訪問を受けた。我々は前述の十二月十四日の書状を福田氏に手渡し、我々が電気復旧工事の開始に喜んで協力する旨を関口氏に確約した。正午、我々は交通銀行で特務機関長に会う機会に恵まれ、我々の十二月十四日付けの書状にたいする正式の返事を口頭で伝えられた。機関長はその返事のなかでとりわけ次のように言った。即ち、この地帯の入口に歩哨を立てること、武器としては警棒をもつだけである限り、民警がこの地帯内を巡回して差し支えないこと、国際委員会が貯えている米一万担を使い、旧市政府から委託された貯蔵米を他所より運び入れて差し支えないこと、電話、電気、水道施設を可及的速やかに復旧することが不可欠であることなどである。しかし、我々の十二月十四日付けの書状の第四項に対しては、一般市民は可及的速やかに各自の自宅に戻るべきであるというだけで、回答はなかった。

この返事に基づき、我々は警官に任務を遂行するように促し、一般市民にはすでに日本軍将校に話をしたのだから今後は酷い扱いをされることはないと安心させ、米の運搬を開始した。しかし、その後、西洋人の同乗なしで路上に出たトラックは全部徴発されてしまっている。(我々の指示で働いていた) 紅卍字会 (Red Swastika Society) が安全地帯内 (その地帯) にあった死骸を片付けるために火曜日 (訳注、十四日) 午前トラックを動かしたところ、トラックは実際に取られたり取られそうになったりして、昨日現在で作業員十四名が連行された。我々の警官は妨害を受け、昨日、司法部に詰めていた者五十名が日本軍当番将校の話では「殺されるために」連行され、昨日午後には私どもの「志願警察官」四十六名が同じように引つたてられて行った。

(この志願警察官はこの地帯内で処理すべき仕事の量が昼夜勤務の正規の制服警官の手に余るように思えたので、国際委員会が十二月十三日に組織したものである。「志願警察官」は制服を着ていなかったし、武器も一切携帯していなかった。ただ、委員会の腕章をつけていただけである。言うなれば、人だかりの整理、清掃、応急措置などの手伝いの雑用をする西欧社会にいるボーイスカウトのようなものであった。) 十四日、日本軍の兵士たちが我々の消防車四両を徴発し、運送に使っていた。

貴大使館及び日本軍に是非とも理解してもらいたいのは、日本軍当局が本市における諸機能を遂行する新たな市政府なり他の機構を確立するまでは、我々が南京一般市民のために市政府の業務を遂行するように委ねられているという点である。しかし、不幸にして、貴国兵士たちには我々にこの地帯の市民のために秩序とサービスマン業務の維持を引き続き行わせようという気持ちがない。そのために、我々が十二月十四日の朝まで担ってきた秩序の維持と必要業務の提供を行うための仕組みが壊れてしまった。言い換えると、貴国部隊が本市に入城した十三日、私どもは市民のほぼ全員を一地帯 (a Zone) に集合させていたが、そこでは流れ弾の砲弾による被害は殆どなかったし、全面退却中であってもシナ兵による掠奪もなかった。貴方たちがこの区域 (that area) を平和裡に掌握し、南京市の残りの地域 (the rest of the city) の治安が確保されるまで、そこでの日常生活を平穩裡に続けさせる舞台は貴方たちのためにしっかりとでき上がっていた。そして南京市は完全に普通の生活を始めると思われた。このとき本市に滞在していた西洋人二十七人全てとシナ人住民は十四日、貴国兵士たちが至る所で行った強盗、強奪、殺人の横行にまったく驚かされたのであった。

我々が抗議の書状で求めていることは、貴方たちが部隊の秩序を回復し、本市の通常生活をできるだけ早く元に戻すことである。後者の過程で我々は喜んでできる限りの協力をしよう。しかし、昨夜 (訳注、十六日夜)

も、午後八時から九時の間に国際委員会の西洋人委員及び会員五名が状況視察のためにこの地帯を巡回した際、この地帯内部にも各入口にも日本人警備兵はただの一人も見かけなかった。我々の警官は、昨日脅しを受けて連行されたので、街路上から一掃されていた。我々の目に入ったのはこの地帯の路上を二、三人の徒党でうろつく日本軍の兵士たちの姿だけであつたのであり、そして今は、敢えて述べるが、この統制されずにうろつきまわる兵士たちが犯す掠奪、強盗の報告がこの地帯のあらゆる所から続々と入つて来ている。これは、私どもの昨十六日付けの書状第二項で述べた、入口の歩哨がこれら兵士をこの地帯に入れないようにするという要求に対して何の措置も講じられていないことを示すものである。

従つて、この地帯 (the Zone) の秩序維持の業務を貴国当局に引き渡すための第一歩として、我々は以下の事項を提案する。

一、日本帝国陸軍は、掠奪、家屋侵入、婦女暴行、拉致の現場をみつけれられた兵士を逮捕する完全な権限を持つて昼夜を問わずこの地帯を巡回する正規の憲兵隊の制度を立ち上げること。

二、日本軍当局は、前中国南京市政府から私どもに委託された中国人警官四百五十名を引き取り、彼らを組織して市民の間に安寧と秩序を維持すること (この秩序がこの地帯の中で乱れたことは一度もなかった)。

三、昨日及び昨夜の本市における火災の件数から見て、もつとも幸にしてこの地帯では皆無だが、消防署 (Fire Department) を貴方側で再組織し、貴軍兵士たちに取り上げられた消防車四両をその新組織に返すこと。

四、できるだけ早く都市行政の専門家を南京に連れて来て新しい市政府が設立されるまでの間、市民の生活を管理すること、我々の地帯 (our Zone) には警官と消防士、事務員三名の他には旧市政府の者で残つた者は皆無である。他のものは全員本市から退避した。貴国軍は南京市の土地建物という形骸と住民の内の貧困層

だけを掌握したのであって、訓練された知的な活動的な人々の殆どは遙か西方に移動してしまっている。重ねて念を押すが、我々は旧南京市政府から委ねられた半ば行政的な業務を続けて行うことに何の関心もない。日本側ができるだけ速やかにこれらの業務を引き受けていただくよう心より希望する。そうすれば、我々はたんなる救済組織となるであろう。

過去三日間のような掠奪行為が続けば、救済問題は一挙に倍増する。我々は可能な限り各家庭は住居と食事の配を各自で行うべしという前提でこの地帯を設立した。我々のような臨時の組織に突然降りかかってきた行政の重責を減らすためである。しかし現在の状況が続けば、数日の内に我々は飢えに瀕した多数の人々を抱えることになり、各家庭の食糧と燃料の蓄えは底をつくこととなり、金、衣料品、日常必需品は多くの人々からうろつきまわる日本軍の兵士たちに奪われ、人々は店を開けるのも路上に出るのも怖がっているのです、普通の商売も他の活動もほとんどできないこととなる。一方、十二月十四日の朝以来、我々の供給用トラックは事実上立往生している。貴国部隊が本市に入城するまでは、我々は食糧を安全地帯に持ち込むのに専念し、配給は後でするつもりでいた。住民には一週間分の食物を持参するように言っていたからである。しかし、難民収容所を食糧のないまま一日以上放っておくわけにはいかなないので、我々職員や委員会の西洋人メンバーたちは米袋を夜個人用乗用車で数カ所の収容所に運ばざるをえなかった！

このようなサービスが早急に行われなければ、人々が飢えに瀕するのに加えて、人心の動揺が起ることになる。一晩に五回も自宅に侵入され、物を奪われ、婦人を犯された家庭がいくつかある。そんな人たちが翌朝になって動き出し、もっと安全な場所を求めたとしても少しも不思議ではあるまい。昨日の午後(訳注、十六日午後)、貴国軍兵站部門 (Supply Department) の将校三名が我々に電話回線復旧の援助を求めていたその

間にも、私どもの記事を付けた電話工事人数名がこの地帯にある自宅から追い立てられ、今はこの地帯内の私どもも知らない数カ所に散らばっている。こんな恐怖状態が続くようでは、必要不可欠のサービスの復旧を行う作業員を配置につかせるのは不可能も同然である。本市駐屯の日本兵の間に規律が即刻もどらないかぎり、シナの二十万市民の多くに襲い来る餓死をどうやって防ぐのか、見当はつけにくい。

本市の市民を保護するに当たり、我々はできる限りの協力をするのに吝かではないことを改めて申します。

敬具

添付書類

委員長 ジョン・H・D・ラーベ

中国語で書かれた説明

中国語で書かれた規則

追伸 昨日正午以降のこの地帯 (the Zone) 内における日本軍兵士の不法行為の事例はのちほど提出します。

死者や負傷兵が外交部の玄関前の車寄せに累々と横たわっている。外交部の庭も中山路全体がそうだったように投げ捨てられた軍装品で埋め尽くされている。入口には手押し車が止まっていて、形を留めない塊が載っている。見たところ死体のようだが、足にはまだ命があるような兆候があった。

我々は大いに目を凝らしながら大通り (訳注、中山北路) を慎重に走った。乱雑に散乱している手榴弾を踏むと吹っ飛ばす危険があったのだ。上海路へと曲がると、市民の死体が幾つか散らばっていたが、進入してくる日本軍に向かって更に車を走らせる。その部隊にはドイツ語を話す医者がいて、日本軍の将軍は二日しないと来ない

と我々に伝えた。日本軍は新街口を通じて北へと（訳注、中山北路を）進軍するので、我々は彼らを追い越すため脇道を幾つか走り抜けて行った。そうして三部隊を武装解除して総勢およそ六百のシナ兵を救った。なかには武器を捨てよという我々の要求に直ぐに応じない兵士もいたが、それでも進撃してくる日本軍が遠くに見えるのと、結局は応じた。それからこの人たちを外交部と最高法院に収容した。

我々国際委員会のうちの二人は更に鉄道部まで車を走らせ、途中で別の一団の兵士四百人をも武装解除した。どこかから近くから撃ってくる。弾がヒューと飛んでいくのが耳に入るが、どこから来るのか。ようやく、馬に乗ったシナ軍将校がカービン銃を空に向けて撃っているのに気づく。我々を驚かすつもりなのか、追い払うためか。馬鹿な奴め、この男がその後どうなったかは知らないが、自動車を専門とするハッツ氏が将校からカービン銃をひったくるのだけは見た。

我々の本部前はぞっとするほどの兵士たちの人だかりだ。彼らが安全地帯 (die Safety Zone) に逃げ込めるよう我々の手で武装解除する。その傍らでシユペアリンクはきつい顔で立ち、モーゼル銃の引き金に指をあて興奮して振り回している。勿論、弾は全部抜いてあるのだが。

私はシナ軍のハプロ社製鉄兜を一つ不正取得した。というより、記念に盗んだ。避難地帯 (Flüchtlingszone) に群衆の人だかりがあれば、日本軍に蹴散らされるか、他の仕方では妨害されるか、むしろ罰せられることを恐れ、我々は次のように公表する。

「難民区内の難民に重要な警告」

一、今後はできるだけ道路に出ないこと。

二、最も危険な現在は、家に入るか、見えない所にいること。

三、難民区 (NAN MIN CHU) は難民のためにある。残念ながら、兵士を保護する力 (power) は難民区にはない。
 四、搜索や調査があれば完全に自由にさせること。いつさい抵抗しないこと。」

□添付資料2

〔以下は富澤 『南京安全地帯の記録』完訳と研究』一四三頁より転載〕

南京国際赤十字委員会名簿 (International Red Cross Committee of Nanking) 寧海路五号
 電話三三三四六、三一六四一、五一九六一

- 1、委員長 ジョン・G・マギー師
- 2、副委員長 李俊南氏 中国紅十字南京分会 (Chinese Red Cross Society of Nanking)
- 3、副委員長 W・ロウエ氏
- 4、書記 アーネスト・H・フォースター氏
- 5、会計 クリストイアン・クレীগー氏
- 6、ポウル・ド・ウイット・トワイネム夫人
- 7、ミニー・ヴォートリン
- 8、ロバート・O・ウイルソン博士
- 9、P・H・モンローフォール氏
- 10、C・S・トリマー博士

- 11、ジ、エ、イ、ム、ズ、マ、ツ、カ、ラ、ム、師
- 12、M、S、ベ、イ、ツ、博、士
- 13、ジ、ョ、ン、H、D、ラ、ー、ベ、氏
- 14、ル、イ、ス、S、C、ス、マ、イ、ス、博、士
- 15、W、P、ミ、ル、ズ、師
- 16、コ、ー、ラ、ポ、ド、シ、ワ、ロ、フ、氏 (Mr. Podshivolof)
- 17、沈、玉、書、牧、師 (Pastor Shen Yshu)

□添付資料3

(南京衛戍司令長官司令部用牋、——割愛)

軍事通行不得攔阻

一九三七年十二月十日付けシナ軍司令部の自動車通行証が私には三日間役に立った。

〔比較と研究Ⅰ〕

このように(二)の一九三九年の『敵機』に「傍線」を付した箇所は(二)の一九四二年の『爆撃』にはあるが、(三)のヴィッケルト版では全て削除されている。従って、(四)の邦訳版にもない。

(二)の一九三九年の『敵機』に「傍線プラス読点」を付した添付資料2の「名簿」は、(二)の一九四二年の『爆撃』では十五日に移されて掲載されているが、(三)のヴィッケルト版で削除されている。従って(四)の邦

訳版にもない。

同じく「読点」を付した添付資料3の「通行証」は(一)の一九三九年の『敵機』にはあるが、(二)の一九四二年の『爆撃』では削除されている。従って(三)のヴィッケルト版にも(四)の邦訳版にもない。

同じく「破線」を付した「早朝から」は、(一)の一九三九年の『敵機』にはないが、(二)の一九四二年の『爆撃』で加筆されたのち、(三)のヴィッケルト版で削除されている。従って(四)の邦訳版にもない。なお(一)の一九三九年の『敵機』に「破線」を付した箇所は、いちいち指摘するのは控えるが、(二)の『爆撃』では表現在微妙に異なっていることを付記しておく。

「比較と研究2」

十二月十七日、に作成された添付資料1の「日本帝国大使館への手紙」が十二月十三日、の件にあることから分かるように、この『敵機』はその日その日の記録ではなく、すでに指摘してきたように一九三九年になって編集執筆されたものである。

なぜラーベは十七日の書簡を十三日に挿入したのであろうか。日本軍が三日間の残敵掃蕩戦でシナ軍将兵を摘発してシナ軍の市街戦を封じ、そうすることによって城内平和の回復に早くも成功した事実を黙殺する代わりに、「統制されずにうろつき回る数人の兵士たち」が徒党を組んで「掠奪、家屋侵入、婦女暴行、拉致」という秩序攪乱行為 (disorders) を起こしていると読者に印象づけたのであろう。そして「人々は店を開けるのも路上に出るのも怖がっている」(本書四三三頁)と強調するのだが、小西伍長ほかが陣中日誌に書いていたように、「街の辻々に少量の品を並べた出店がズラリと並ぶ。……行き交う難民には笑顔が多く、惨たる街の中に小さな平和を感じた」というのが陥落後の実情に近かったであろう。

そのうえこの十二月十七日の書簡は占領直後の南京を考えるうえで決定的に重要なことを記している。「過去三日間のような掠奪行為が続けば」(本書四三三頁)と書かれていることに注意する必要があるだろう。「過去三日間のような大量殺戮が続けば」ではないのである。

ともあれ十二月十七日の日本帝国大使館への手紙は秩序攪乱行為の頻発を強調する意図から十二月十三日に挿入されていたが、(二)の一九四二年の『爆撃』では十六日の末尾に挿入され、(三)のヴィッケルト版では削除されている。従って(四)の邦訳版にもない。

なお小さな事だが、十二月十三日のタイプ活字は大きく、十二月十七日の「日本大使館への手紙」のタイプ活字は小さい。そして十二月十三日の最初の頁には、私たちがドイツの公文書館から得た紙コピーには「117頁」(S117)と印字され、その次の頁に挿入された十二月十七日の国際委員会の「日本大使館への手紙」には最初の頁が「190頁」(S160)とタイプされ、最終頁には「173頁」(S173)とタイプされている。

一方、私たちがドイツの公文書館から得たDVDの『敵機』の十七日を見てみると、その「160頁」から「173頁」がそっくり抜け落ちている。このことから、この二月十七日の日本帝国大使館への手紙は第三者が何らかの理由で十二月十七日から十二月十三日に移し替えたと考えられる。

「比較と研究3」

南京城内の人口を考える上で、この十二月十七日付け日本帝国大使館への手紙の末尾に「二十万市民」と書かれていることを見落としてはならない。

〔比較と研究4〕

本書四二八頁五行目に「国際赤十字協会」(International Red Cross Committee)の設立とその名簿が出てくるが、これは赤十字の名を冠してはいてもアンリー・デュナンに始まる国際赤十字とは何の関係もない私的な組織であった。というのは、新設される各国赤十字社(National Red Cross Society)は国際赤十字委員会(International Committee of the Red Cross)に承認されて初めて効力を発するが、その手続きがとられていなかったのである。未承認であったことは、「私どもは上海の国際赤十字会と中国の紅十字会からの承認を求めています」(本書四七三頁)というフォースターの十二月十五日付け手紙に明らかであった。

注、『国際ブリタニカ大百科事典』一九七四年、第11巻三二五頁～三二七頁。

〔比較と研究5〕

この国際赤十字委員会(International Red Cross Committee)に続いて「赤十字の大きな旗が外交部の上にはためく」という記述が見える。これは拙著『再現 南京戦』(二二二頁)にも記したように、日本軍少尉にも視認されていた。ただ問題は、ラーベが「旗は大急ぎで手に入れた」と言いながら、どこから手に入れたか、明記していないことであろう。この種の特殊な旗は一般に入手困難であったことを考えれば、これは中国紅十字会が政府の承認のもと彼に提供したと考えるのが順当であろう。とすれば、政府機関の南京撤退以前に、すなわち十一月中旬までに、赤十字の旗や紛らわしい名の私的な「国際赤十字委員会」設立の件は決まっていた、と考えるのが合理的であろう。

〔比較と研究6〕

邦訳版(一〇九頁)が本書四三四頁十六行目に出てくる「ドイツ語を話す医者」(einem deutsch-sprechenden

Arzt) を「軍医」(Militärarzt または Feldarzt) と訳すのは、不正確な訳であった。

「比較と研究7」

十二月十三日、金沢第九師団敦賀第十九連隊の土屋正治第四中隊長は城内に先陣として入った時の状況を次のように回想している。

「城壁こそ砲撃によつて破壊されていたが、街並の家々は全く損壊なく、瓦礫一つ落ちていない様がわれわれをつつみ、勇敢な部下も一瞬たたずんだ。全く未だかつて味わったことのない、言葉で表せないこの静けさは、いつの間にか私を中隊の先頭に位置せしめていた。市街は深く進入すればする程、正に死の街という感を深くせしめられた。敵弾の飛来はもちろん、人影一つ見えず、肅然とした軒並みのみが果てしなく続いていた」

このように不気味な静けさが支配するなか、「十二月十三日午後、一名の日本軍大尉が一群の兵士とともに漢中路で休息している」という本書四二九頁にあるような長閑な光景のしかが見られたであろうか。

註、土屋正治「黙過してよいのか南京大虐殺の報道」、『偕行』昭和五八年三月号三頁。

十二月十四日

我々は日本軍司令官 (Kommandanten) に私的に渡すつもりの手紙を英語と日本語で作成した。その通訳を務めたのは元南京日本領事館秘書の孫 (Sung) 氏で、六十才の彼は我々の下部組織の紅卍字会 (Rote Swastika Vereinigung) の一員である。我々はさきまな日本軍将校六名ほどと話したが、皆、明日か明後日には日本軍の谷寿夫將軍 (General des japanischen Heeres, Hisao Tami) が来る見込みなので、そこに行くように言った。

町を巡回して初めて正確に破壊の範囲を知る。百メートルか二百メートル毎に死体にぶつかる。私が調べた市

民の死体は背中が撃たれた跡をはつきりと示していた。この人たちは逃げる時に多分後ろから撃たれたのだ。日本軍は十人から二十人の部隊で町を行進し、店を掠奪している。自分の目で見ていなければ、これは信じられないだろう。日本軍は店の窓や扉を打ち破り、気に入ったものを持ち出している。食糧がないからだということだ。パン屋のドイツ人のキースリングの店がどう掠奪されたかは、私が目撃者だった。ヘンペルのホテルもこじ開けられた。中山路と太平路の店はほどこもだ。戦利品を箱詰めして運ぶ日本軍兵士も幾人かいた。略奪品を安全に運ぶため人力車を徴発する者もいた。我々はフォースターと一緒に彼の伝道団の英国教会を太平路に訪ねた。教会の隣の家には二発の爆弾か手榴弾が落ちていた。家ですら何軒かこじ開けられ盗まれている。フォースターは数人の日本軍兵士が自分の自転車を持ち去ろうとしていたので驚かすと、我々の姿を見るや彼らはこそこそと逃げて行つた。我々は日本軍の偵察隊を呼び止めて、この土地はアメリカ人の所有だと注意を促し、掠奪者にはここを出るよう指示するよう申し入れた。彼らは笑うだけで我々は無視された。

二百人のシナ人労働者 (*chinesischen Arbeitern*) の一団が避難民地帯 (*Flüchlingszone*) で拾い集められて、縛られながら日本軍兵士に追い払われて行くのに会う。どんなに抗議しても無駄だった。司法部の建物からは、そこに我々は千人ほどの兵士を武装解除して収容していたのだが、およそ四百から五百の人々が縛られて追い立てられていく。彼らは銃殺されたのだと思う。機関銃の一斉射撃音が何度も聞かれた。この出来事に我々は驚きのあまり硬直した。外交部には負傷兵を収容していた (*unterbrachten*) のだが、そこは我々には (*von uns*) 立ち入り禁止となる。シナ人医師も看護要員も建物の外に出ることを禁止される。我々は一二五人のシナ人避難民グループを日本軍の手に落ちないうちにすばやく空家に収容することに成功した。韓氏の話では、我が家の近所の家から十四才から十五才の若い娘三人が誘拐されたという。ベイツ博士の報告では、我々の安全地帯 (*unserer*

Safety Zone) の何軒かの家では避難民がなけなしのガラクタを奪われたという。たった一ドルですら侵入者の前では安全ではないのだ。部隊が何度も私の家にもやってくるが、私が姿を見せて鉤十字の腕章を鼻先に突きつけてやると立ち去る。アメリカの国旗はまったく不人気だ。私たちの委員会の委員のゾーン (Zone) 氏の車はアメリカの国旗を取りはずされて盗まれた。

我々は休みなく午後六時まで出歩いた。この犯罪の情報を正確に入手するためである。韓は思い切って家から出ようとしてもしない。日本軍の将校は個人差はあっても皆丁寧で礼儀正しいのだが、一部の兵卒は態度がひどい。それでいて飛行機からプロパガンダのビラを撒いて、日本軍はあらゆる面で市民を人道的に遇すると言っている。疲れて殆ど絶望して、本部——寧海路五号——に戻る。城内各地で苦悩が続く。数百人が飢えに苦しむ司法部 (Justizgebäude) に、我々は自家用車で米袋を運ぶ。外交部 (Wachiaopu) の人たちは負傷兵 (Verwundeten) とともに何を食べて生きているのか、私には不思議だった。我々のところには本部の中庭にもう何時間も前から重傷兵七人が横たわっていたが、やっと救急車で鼓楼病院 (南京大学病院) に運ぶことができた。その中には脛を撃たれた十才ほどの男子がいたが、大声で痛みを訴えることもなかった。

十二月十四日 夕方

私は自分自身を〈芸術の分からぬ無教養な俗物〉と決めつける気はないが、ただこれまでの人生で詩などを読むのにそう熱心でなかったことだけは認めざるを得ない。それは立派なハンブルク商人という職業と、何となく関係ないように思えたのだ。しかし時とともにやがてついに〈教養不足〉 (Manko in der Bildung) が酷く意識されるようになって、誰も気づいていないかと前もって左右を確かめたりもせずに、家族の〈女性の〉壁の書棚が

ら、あれやこれやの本を、私の知識不足を補うため、あるとき取り出した。しかしそれもやがて誰かがうすうす気づいたに違いない。女性ほんとうに何でも気づきながら、私たちの欠点を見て見ぬふりをしている。私のドーラは確かにまったく特別だ。それゆえ——いずれにせよ——カレンダーの表面に貼った格言はいよいよ美しくなつて、私には時に全く詩的となつて、明らかに注意を払つたり抗議することもなく日めくり式のカレンダーにだらしく吊され先送りされた。そして今日もまたとにかく私の前に一枚がある。

生きる

脈打つたび——勝利の確信

日々の務め——つねに終わりなき戦い

それが生きることだ。

死をも恐れない

困難をも物ともしない

黙々としたなかから生きる意志が蠢く。

憎しみに燃えるのは

偽り——どちつかずの曖昧。

恋焦がれるのは

自由——光だ。

そう、生きるのだ。

脈打つたび——勝利の確信

日々の務め——つねに終わりなき戦い。

父祖の残せし神聖なる遺産——大地

この人生を、この創造を、民族と大地のために。

右の紙片はドーラが私のカレンダーに貼り付けたものだが、何度も何度も読んでは毎日少しずつ先送りして吊るしている。生命に今にも危険があるときは、殊のほか心に迫るものがある。ドーラ、ありがとう！

ニューヨーク・タイムズの特派員、ダーティン氏が、車で上海へ戻ろうというのは見上げた考えだ。きつとやり遂げると思つてはいないにしても、ともかく次の電報を持っていつてもらった。「上海のジーマンス中国（電報宛先 Motor Shanghai）へ、十二月十四日午前九時現在、私も現地従業員も無事。天津のレース・コース路百三十六のD・ラーベ夫人とベルリンのシュレーガー氏にどうかご通知を——ラーベ」、一九三七年十二月十四日、南京にて。たった今しがた連絡があつて、ダーティンは目的を果たせずに戻ってきた。残念！

□添付資料 4

（訳注、この日記体風回想録に挿入されている手書きメモ）

* 2 (DSC 0701' 上)

……Tsingtaus durch die Japaner mit erlebt und war damit mir desselben Glaubens, dass die größte Gefahr für Nanking nicht die einrückenden japanischen Soldaten, sondern die sich zurückgehenden chinesischen Truppen

sein werden. Sollten wir uns getäuscht haben?

「□□□日本人を通じて共に体験した青島の……」そのことから南京の最大の危険は、私は同じように思うが、進入してくる勝ち戦の日本兵ではなく、退却するシナ兵になるだろう。我々は騙されていたのだろうか？」

* 3 (DSC 0701' 下)

……in die ich mich als Vorstandsmitglied einreihen lasse. Rev. John Magee wird Vorsitzender. Drei von den Vorstandsmitgliedern fahren zu den Militärlazaretten, die im Auswärtigen Amt in der Central Universität und in den Krieges- und Eisenbahnministerien eröffnet wurden und besuchen nach Besichtigung dieselben über den traurigen Zustand □□□ dieser Hospitaller; ……

「□□□そこに私は役員に入れてもらった。ジョン・マギー師が委員長となる。我々役員の三人は、外交部、中央大学、軍政部、鉄道部内に設けられていた野戦病院に車でかけ、視察を終えて、これら病院の□□□悲しい状況について……を訪ねた……」

* 4 (DSC 0702' 上)

……des Auswärtiges Amtes wehen sieht, die wir uns schleunigst beschafft haben. (Das Auswärtige Amt liegt ausserhalb der Flüchtlingszone) Tote und Verwundete liegen neben und übereinander in der Einfahrt, liegen in den Gängen, Korridoren und Kellern des Wai Chiao Pu. Der Garten ist, wie die ganze Chung Chang Lou (=Hauptstrasse) mit fortgeworfenen militärischen Ausrüstungsstücken be □□□…….

「……我々が大意で作った外交部(訳註 外交部は難民区の外にある)の□□□はためいているのをみて……。外交部の車の進入口や、通路、廊下、地下室への道には死傷者が累々と折り重なって倒れ、庭は、中山

路(メイン通り)と同じように、投げ捨てられた軍装品で覆わ□□□……」

* 5 (DSC 0702' ト)

Wir fahren die Hauptstrasse mit grosser Vorsicht entlang □□□. — es besteht Gefahr, dass man auf die herumliegenden Handgranaten fährt, was gleichzeitig bedeutend mit einer Himmelfahrt wird. Wir biegen in die Shanghai Lu ein, in der verschiedene tote Zivilisten herumliegen und fahren um den einrückenden Japanern entge □□□□□□ derselben, ……

「メイン通りを非常に用心して走った。あたり一面散らばっている手榴弾を踏む危険がある。踏めばたちまちあの世行きた。上海路に曲がって入った。いくつもの市民の死体が転がっていたが、やがて進入してくる日本軍を迂回して走って□□□。□□□その同?……」

* 6 (DSC 0703' 上)

……nach Norden und treffen, wie wir vermutet hatten, schon am Shansi Bvad Circle (sogen. Bayerischer Platz) auf verschiedenen Abteilungen von einigen hundert chinesischen Soldaten, die nicht mehr über Yangtse fliehen könnten. Wir erklären ihnen die militärische Lage — ……

「北へ……、我々は、予測していた通り、山西ロータリー(バイエルン広場)でもはや揚子江へ逃げられないシナ兵の数千人規模の数個部隊に遭遇し、彼らに戦況を説明した……」

* 7 (DSC 0703' ト)

wir hoffen diese Leute gerettet zu haben und verschaffen ihnen Unterkunft im High Court und anderen Lagern. Zwei von uns fahren dann □□□□ nach Norden und hoffen beim Eisenbahnministerium weitere etwa 400

Soldaten, die ebenfalls ihre Waffen und sich willig in die verschiedene Lager unterbringen lassen. Von irgendwo in der Nähe wir……

「我々はこの人たちを救えたと希望を持ち、最高法院や外交部などの施設を提供した。我々二人は、それから北へ車を走らせ、鉄道部で更に約四百人の兵と遭い、彼らは同じように武器を置き適宜いくつかの施設へ入らせた。どろか近くから、、、、、我々は、……」

*∞ (DSC 0704' 上)

……mir noch, dass unser Autoexpert, Herr Hatz, ihm den Karabiner entriß. Vor unsrem Hauptquartier — Ninghai Lu No.5 — ist ein grosses Gedränge von chinesischen Soldaten, die ihre Waffen vor unseren niederlegen

「……まだ私に、我々の車の専門家ハッツ氏が、その男からカービン銃を取り上げたことを……。我々の寧海路五番の本部前で、武器を置く大勢のシナ兵が……」

*∞ (DSC 0704' 下)

Da wir befürchten, dass Menschenansammlungen in der Flüchtlingszone von den Japanern auseinandergetrieben oder anderweitig gestört bzw. bestraft werden, erlassen wir die folgende Veröffentlichung.

Wichtige Mitteilung für Nan Minn

Nan-Min Chu (Flüchtlinge) in der Flüchtlingszone

- (A) Von jetzt ab sollten die Strassen der Zone möglichst frei gehalten werden.
 (B) In Augenblick der Gefahr, soll sich

「難民地帯に人が群がっていると、日本人に蹴散らされるか、他のやり方で妨害を受けるか、あるいは罰せられる恐れがあるので、我々は、次の通告を出した。

安全地帯の難民区（難民）への重要なお知らせ

(一) 今から安全地帯の道路には出ないこと

(二) 危険の時は、……するは)と……」

* 10 (DSC 0705' 上)

14. Dezember

Wir haben ……verweisen. Vor dem Gebäude der Bank of Communication am Chin Kai Kou (Potsdamer Platz) treffen wir Herrn Fukuda, Secreitär der japanischen Botschaft, der uns wortlich — folgend mitteilt:

The Japanese Army if bad for

「十二月十四日

我々は……指示する。

新街口（ポツダム広場）の交通銀行の建物の前で、我々は日本大使館の福田書記官と会い、彼は口頭で次のように伝える。日本軍は、 もしに悪い」

* 11 (DSC 0705' ト)

Sie? — erhielt ich zur Antwort — wir sind hungriig — wir müssen zu essen haben — unsere Proviant Kolonne sind noch nicht eingetroffen. — Reichen Sie Ihre Lehnenforderungen bei unserer Regierung ein. Man wird Sie entschädigen —

□□□□□□ später abgebrannt ……

「あなたがたがっ——私は返事を得た——我々は腹が減っています。——食糧が必要です——輜重隊がまだきていません——貴方がたの貸付けの請求書は我が政府に出してください——補償します——?? 後で焼失……」

* 番号ナシ (DSC 0706)

Aus dem Tagebuch von John Rabe, Vorsitzender des Internationalen Komitees der Nankinger Flüchtlingszone

南京難民地帯国際委員会委員長ジョン・ラーベの日記から抜粋

(Fortsetzung) (続き)

一九三七年 十二月十三日

Bevor ich gestern Abend, totnüde nach den überstündenen Strapazen ins Bett sank, hatte ich den chinesischen Angestellten unserer Firma, den vielen Flüchtlingen, die bei mir im Hause und im Garten Unterkünfte fanden und mir selbst die tröstliche Versicherung □□□□□□……standen. Während der Nacht werden die Japaner die vom chinesischen Militär verlassene Stadt besetzen und morgen, übermorgen — spätestens in geringen Tagen — wird die Ordnung in der Stadt sowie die Postenverbindung mit Shanghai von den Japanern wieder hergestellt und alles gut sein. — In diesen Gedanken hat mich ? Sperling, immer laur Polizeikommissar, bestärkt. Sperling hatte während des Weltkrieges die Einnahme □□□□……

「昨晚寝る前、困難を乗り越え、もうくたくたでベッドに沈む前、会社のシナ人従業員や難民が私の家や庭を安全な宿り場所と見て集まっているのを見つけたが、私ですらちっとも慰みにもならないのだが……□□□□。

□□□□ 夜の間に、日本軍はシナ兵が去った街を占領し、明日、明後日—遅くとも近い内には日本人が町の秩

序を回復し、上海との郵便連絡を整え、万事うまく行くだらう。こう信じて、我らのいつも心穏やかな警察委員シユペアリンクは私を元気づけてくれた。シユペアリンクは、世界大戦中、占領を……」

*番号ナシ (DSC 0707' 上)

6 Uhr früh □□□□□□□□□□□□□□ geweckt wurde. Es hagelt wieder einmal Bomben. Die Japaner haben in der letzten Nacht — wie mir gemeldet wird nur einige Stadttore besetzt, sind aber in das Innere der Stadt noch nicht vorgedrungen. Im Komitee-Hauptquartier innerer Zone angekommen, gründen wir innerhalb von 10 Minuten eine International Red Cross Association of Nanking,……

「六時早朝、□□□□目覚める。また雨霰の爆弾だ。私への報告によると、日本人は昨晚、町の城門のいくつかを占領したが、中には入ってきてはいない。安全区委員会本部に到着して、十分で南京国際赤十字会を立ち上げ、□□□□□□□□」

*番号ナシ (DSC 0707' 下)

□□□□ deren Ärzte und Pfleger als die Beschienung zu stark wurde und der Rückzug der chinesischen Truppen einsetzte, alle miteinander davonlassen und die Kranken ohne jede Aufsicht und Pflege zurücklassen. Wir holen eine ganze Anzahl des Personals zurück, das wieder Mut bekommt, als es die grosse Rote Kreuz Flagge über den Eingang □□□□医者と看護師は□□□□砲撃が余りにひどく□□□□シナ兵の退却が始まったとき、みな先を争って逃げ、監督者も見る人もなく病人は残された。入口に翻る大きな赤十字の旗を……再び勇気を得たかなりの数の人を我々は取り戻す。」

*番号ナシ (Teil2 DSC0708, 上)

……sah. Am Garteneingang □□ Schubkarren mit einer formlosen Masse, die mit den Füssen ein Zeichen gibt, dass noch Leben in ihr steckt — Wie ich mich nach Tragen umsehe — schockt sich der Körper zur letzten Ruhe und □□□□ ohne Betenden zu den □□□□ Leichen gelegt werden.

□□□□ 見た。庭の入□で □□□□ ぐったりした塊を載せた手押し車には、足が生きていることを示しているが、手押し車を牽いている人の方を振り返って見たら、その体がビクリと臨終で動き、お祈りは□□□□なく、□□□□の死体となって横たわる」

*番号ナシ (DSC 0708' 下)

(□□□□ Mit einem deutschsprechenden Arzt, teilt uns mit, dass der Japan. General, der Höchstkommandierende, den wir zu sprechen wünschen, in 2-3 Tagen erwartet wird. Da die Japaner über Chin Kai Kou (dem sogenannten Potsdamer Platz) nach Norden marschieren, fahren wir im Auto auf Umwegen so schnell wie möglich an ihnen vorbei ……)

□□□□ ドイツ語を話す医者がいる □□□□ が伝えるところ、我々が話したいと願っている日本軍の最高司令官は、二乃至三日中に来るであろうと。日本人は新街口（所謂ポツダム広場）を経由して北へ前進するので、我々は車で迂廻し出来るだけ早く彼らの側を通り過ぎて □□□□」

*番号ナシ (DSC 0709' 上)

……veranlassen die Leute, sich ihrer Waffen zu entledigen. Manche von ihnen zögern ihre Waffen fortzuwerfen — entschlossen sich dann aber doch dazu, als sie die Japaner in sichtbare Weite rücken sehen.

□□□□ 彼らの武器を片づけさせる。彼らの多くは武器を置くのを渋ったが、日本人が近づいてくるのが視野

Wiederstand □□□□□□□□□□

「各々が□□□□見えなくなると……」

(三) 難民区は難民のためのもの。難民区は兵士に保護を与えるものではないこと。

(四) 日本軍による何か家宅捜索か調べが行われる場合は、抵抗せぬこと、□□□□□□□□！」

* 番号ナシ (DSC 0711' 下)

Re □□□□ — we the Embassy want to present that “the Japanese Armece will der Stadt ein böses Schicksal beenden — wir. Botschaft wünschen das zu □□□□” — diese Mitteilung macht uns sehr bedenklich — Bei unserer Rundfahrt durch die Stadt — geplündert waren. Ich machte die □□□□□□□□□□, auf die Deutsche Hakenkreutz flag aufmerksam, die über Haus wehte. Was wolten……

「□□□□について——我々大使館は、以下を伝えたい——日本軍は市の不運に終止符を打ちたい——我々大使館が願うところは、□□□□——この通告は我々を大変不安にした——掠奪された街を回ってみて、私は□□□□に、□□□□家の上にはためくドイツの鉤十字の旗に注意を向けさせた。何を望む□□□□□□□□□□」

□ 添付資料5

「以下は富澤『南京安全地帯の記録』完訳と研究』一三八頁より転載」

南京日本軍司令官殿

南京安全地帯国際委員会 寧海路五号

一九三七年十二月十四日

謹啓 (Honorable Sirs)

私どもは貴砲兵部隊が安全地帯 (the Safety Zone) に砲撃を加えなかった立派なやり方に感謝し、この地帯 (the Zone) のシナ人一般市民の保護に関する今後の方策について貴下との接触を確立するために、この手紙をお送りしております。

国際委員会は人々をこの地域内の建物に収容する責任を負い、住民を当面養うための米と小麦粉を貯蔵し、この地域の警察官を管理しています。

私どもは国際委員会が以下のことをできるよう謹んで要請するものであります。

- 一、安全地帯の入口には日本軍歩哨一名を立てて頂くこと。
 - 二、国際委員会の民警が拳銃のみを携帯してこの地域の治安を維持することをご許可頂くこと。
 - 三、この地域で米の販売を続け、国際委員会のお粥炊き出し所 (Soup Kitchen) を運営することをご許可頂くこと。私どもは市内数カ所に米の貯えをもっておりますので、その確保にトラックを自由に往来させて頂くこと。
 - 四、一般市民が各自の住宅に戻れるようになるまでは現在の避難民収容のやり方を続けることをご許可頂くこと (家に戻れるようになって、家のない哀れな数千の避難民は世話を必要とする)。
 - 五、電話、電灯、水道をできるだけ速やかに復旧するに際しては、ご協力させて頂きたいこと。
- 昨日午後、多数のシナ人兵士が城内北部に追いつめられた時、不測の事態が発生しました。彼らの中には私どもの事務所に来て、私どもに人道の名において命を助けてくれるよう懇願するものがいました。私どもの委員会の代表たちは貴司令部を探そうとしましたが、漢中路 (Han Chung Lu) の指揮官 (a captain) のところ

から先に行きませんでした。そこで私どもはこれらの兵士全員を武装解除し、この地帯 (the Zone) 内の建物に収容しました。これらの人々が、現在望んでいる平穏な市民生活に戻れるよう、貴軍の慈悲深い許可をお願いします。次第です。

次に私どもはジョン・マギー師 (米国人) を委員長とする「南京国際赤十字委員会」(International Red Cross Committee of Nanking) を紹介したいと思います。この国際赤十字委員会は外交部、鉄道部及び軍政部内の旧陸軍病院を管理しております。赤十字委員会はこれらの施設にいた男子全員を昨日武装解除しました。そしてこれらの建物が病院のためにのみ使用されるよう取り図らいます。もし負傷者全員を外交部の建物に収容することが可能ならば、シナ人負傷者全員をそこに移すことを提案いたします。私どもはこの城内の一般市民の世話をすることにできる限りの協力を喜んでいたします。

南京安全地帯国際委員会 ジョン・H・D・ラーベ 委員長 敬具

「比較と研究 8」

このように (一) の一九三九年の『敵機』に「傍線」を付した箇所は (二) の一九四二年の『爆撃』にはあるが、(三) のヴィッケルト版では全て削除されている。従って (四) の邦訳版にもない。

一方「破線」を付した箇所は、(一) の一九三九年の『敵機』にはなく (二) の一九四二年の『爆撃』で加筆されている。しかし (三) のヴィッケルト版はこれを削除しているため、(四) の邦訳版にもない。

ただ「破線」を付した「私が調べた市民の死体は背中が撃たれた跡をはっきりと示していた。この人たちは逃げる時に多分後ろから撃たれたのだ」は、ヴィッケルト版にあるため邦訳版にもあるのだが、一九三九年の『敵

機』にはない。この記述の初出を調べてみると、一九三八年六月八日付けの「ヒトラーへの上申書」(Teil3, DSC0671)であった。ラーベは果たして背中を撃たれた市民の死体を目撃していたのであろうか。この衝撃的な事実を目撃して一九三八年の「ヒトラーへの上申書」には書いたが一九三九年に編集執筆した『敵機』には書き忘れたのであろうか。そのため一九四二年の『爆撃』に加筆したのであろうか。そうとは考えにくいであろう。国際委員会が日本大使館に提出した『南京安全地帯の記録』(Hsi, Documents of the Nanking Safety Zone)のなかにも記録されていない。飯沼守上海派遣軍参謀長が原田熊吉少将から「南京の特務機関兼宣撫のため佐方少佐を置く」(I一五八頁)と伝えられるのが、その二日後の十六日であった。以上のことから判断すると、ラーベの創作と考えるのが順当であろう。

〔比較と研究9〕

本書四四一頁十四行目に出てくる通訳の「孫」とは孫叔栄のことである。彼は一九三八年一月一日に成立した南京自治委員会では副会長となり、同年三月三日に成立した「維新政府南京特別市」では高冠吾市長に次ぐ秘書長となっているが、他方でラーベの記述からも分かるように国際委員会の下部組織「紅卍字会」を通じてラーベたち欧米人とも深い関係にあった。

〔比較と研究10〕

この十四日の冒頭に日本軍の谷寿夫将軍 (General des japanischen Heeres, Hisao Tani) が言及されている。二月十三日に言及された「二日しないと来ない」という「将軍」は谷寿夫中将のことであったと判断される。

その谷中将の第六師団は城内南部を担当して安全地帯を担当していなかった。しかも拙編著『一九三七南京攻略戦の真実』(二二二七頁)によれば、城門陥落翌日には蕪湖へ転進する「準備」に入っていた。

このような当時の実情から判断すると、日本軍将兵が担当外の谷師団長の到着を待てと言ったはずもなく、これもまたラーベの創作であったと考えるのが合理的であろう。

〔比較と研究11〕

一九三九年に行政院宣伝局新聞訓練所が編集した『南京指南』（南京新報社、六八頁）によれば、繁華街の太平路には、英国聖公会の教会があった。その教会を太平路に訪ねたラーベは、「教会の隣の家には二発の爆弾が手榴弾が落ちていた」と記す。

一方、ジョン・マギー師は十二月三十日付けの妻宛の手紙に、「我々の教会と住宅を除けば太平路全体が焼き払われたと言つてよ」（傍点筆者、Practically the whole of Taiping Road with the exception of our Church and residences has been burned.）と書いていた。どちらが正しいのであろうか。後者が正しいのであれば、ラーベも一九三九年の『敵機』のどこかに記録していたはずである。今後の一つの視点であろう。ここでは、マギー師の言は国際委員会が日本大使館に提出した『南京安全地帯の記録』にもないことを指摘するに止めたい。

〔比較と研究12〕

(一)の一九三九年の『敵機』でも(二)の一九四二年の『爆撃』でも(三)のヴィッケルト版でも、「フォースターは何人かの日本兵を驚かした」(Foster überrascht einige japanische Soldaten)と記されているが、(四)の邦訳版では「フォースターは……びっくりにした」(一一〇頁)という逆の意味の訳となっている。

〔比較と研究13〕

ラーベは「部隊が何度も私の家にもやってくるが、私が姿を見せて鉤十字の腕章を鼻先に突きつけてやると立ち去る」(本書四四三頁)と言う。しかし敵本『真相・南京事件』(七〇頁)も言うように、何を言っても「笑う

だけで無視する」日本軍兵士が鉤十字の腕章を突きつけられると（笑って無視するのではなく）なぜ立ち去ったのであろうか。

〔比較と研究14〕

ラーベは「外交部 (Waichiaopu) の人たちは負傷兵 (Verwundeten) とともに何を食べて生きているのか、私には不思議だった」（本書四四二頁）と言う。日本軍が「中山路の十字路で……銃撃を受け」（『南京戦史』一九四頁）ている十四日、外交部を訪問したとすれば、その途中、中山北路の日本軍の歩哨と外交部の完全武装のシナ軍衛兵から「どこに行く」と誰何すいかもされず通行できたのであろうか。外交部では、金沢第七連隊の平本渥ひろむち一等兵が言うような重傷兵と「赤々と燃え」る書類を見ることがもなかったのであろうか。

〔比較と研究15〕

注意深く読むと不思議な伝聞に気づかされる。本書四四三頁一行目では「韓は思い切って家から出ようともしない」と書きながら、「韓氏の話では、我が家の近所の家から十四才から十五才の若い娘三人が誘拐されたという」（本書四四二頁十六行目）とラーベは記す。

外出しようとしていない韓は誰かからそう聞いたか、そのように話を創作したか、そのどちらかであろう。それにしてもラーベは確かめもせず、伝聞を書き記していたことになる。同じく「ベイツ博士の報告では、我々の安全地帯 (unserer Safety Zone) の何軒かの家では避難民がなけなしのガラクタを奪われたという」（本書四四二頁十八行目）という伝聞を書き留めている。いずれも伝聞の伝聞の記録であった。そのような流言飛語を、国際委員会が南京安全地帯の不祥事を集めた『南京安全地帯の記録』のなかに確認することはできない。それゆえこれは韓やベイツ師の創作ということになろう。

そもそも十二月十四日は残敵掃蕩戦の初日にあたっていた。日本軍將兵にとつては死傷者が出るなかガラクタよりも命の方が大事であったことは言うまでもない。掃蕩戦に出た金沢第七連隊本部通信班の小西與三松伍長は『陣中日記——上海から南京へ』（二三六頁）に次のように記している。

「街の中がひっそりとしていて、気味悪いくらいだったので銃に弾を込め、最新の注意を払っての往復だった。

……

しかし南京での徴発は掠奪になり、一個小隊に区分された掃蕩隊は城内全域に、担当区域を指定し配置され、昼夜を分かたず水も漏らさぬ掃蕩を行っており、憲兵隊も要所要所で携帯品の厳しい検査を行っていて、とても徴発など出来る状態ではなく、加えておびただしい捕虜の数は十万とも二十万とも言われ、こちらにも飯を喰わさねばならないので、当分は満足な休養などとても期待できない話が、本部要員や指揮班の者たちから兵隊間に伝わってきた」

生きるか死ぬかの戦場では、これが偽らざる実情であったろう。そう考えると、結局ラーベの記述は「彼が他人に起こったと考えて貰いたかったこと、恐らくは起こったと彼が考えたかったことを語っているに過ぎない」と判断してよいのであろう。

〔比較と研究16〕

この日の十四日から日本軍は残敵掃蕩戦を始めたばかりであった。日本軍の課題は非武装中立の安全地帯から〈シナ軍將兵〉を摘発して市街戦を未然に防ぐことであって、〈市民〉に日本軍の方針を伝えることではなかった。従って「飛行機からプロパガンダのビラを撒いて、日本軍はあらゆる面で市民を人道的に遇すると言っている」（本書四四三頁六行目）という状況にはなかった。日本軍機が十二月十四日に市民に向けてビラをまいたという

記録はないのである。

〔比較と研究17〕

添付資料4（本書四四五頁以下）は（二）の一九三九年の『敵機』の十四日の件くだりに、タイプ打ちされた「十二月十四日」を台紙にして貼り付けられた手書きメモである。手書きの分量としては決して多くはないが、頁数にすれば手書きであるため十一頁にわたっている。そこに番号がふつてあって、「2」から始まり「11」で終わっている。その後は番号ナシのメモが続いている。添付の理由、作成の日時、作成の理由は書かれていない。これらの手書きメモは（二）の一九四二年の『爆撃』で削除されているため、（三）のヴィツケルト版にもない。従つて（四）の邦訳版にもない。なお難解な手書きメモの解読と翻訳は全て門山氏によっておこなわれた。活字化に際しては、判読不能な箇所や文章の途切れた箇所は□□□で示した。

〔比較と研究18〕

この十四日に収録された十二月十四日付けの「私どもは貴砲兵部隊が安全地帯 (the Safety Zone) に砲撃を加えなかった立派なやり方に感謝し……この手紙をお送りしております」に始まる「南京日本軍司令官」宛て国際委員会の手紙は、（二）の一九四二年の『爆撃』では翌十五日の冒頭に独訳されて本文中に移されている。しかしヴィツケルト版はこれを削除してスミス氏（ロイター通信社）の講演録を挿入し、邦訳版（一一六頁）はそれに従っている。なおヴィツケルト版の脚註（S.429）によれば、その出典はドイツ外務省政治公文書館 (Aus dem Politischen Archiv des Auswärtigen Amtes) の「China-Japan, Pol. VIII, Bd.19」となっている。

〔比較と研究19〕

本書四四三頁の、「重傷兵七人が横たわっていた……その中には脛すね (Unterschenkel) を撃たれた十才じゅうさいほどの男

子がいた」という少年兵を、「鼓樓病院の患者に関するメモ」(二二八頁)に確認することはできない。

なおラーベは、「アメリカの国旗はまったく不人気だ」と言うが、「英国旗や米国旗を掲げた家屋には、多数の中国兵が隠れていた」(南京戦史二二六頁)という事実については黙して語っていない。

十二月十五日

午前十時、K・関口海軍少尉(訳注、関口鉦造海軍大尉)の訪問を受ける。日本帝国海軍軍艦「勢多」の艦長と将校からの挨拶を委員会に伝えるためであった。我々は少尉(訳注、大尉)に日本軍の最高司令官宛ての手紙の写しを手渡す。

午前十一時、日本大使館の専門担当官(Attaché)福田氏が訪ねてきたので、我々は作業計画の詳細を話し合う。南京の電灯廠(訳注、発電所)や水道や電話の早期復旧は日本軍と我々の双方のためになることは福田氏も納得済みだ。その時は、委員会も私も福田氏に助力できる。韓(Han)氏も私もこの三施設の状況はよく知っている。我々が技術者や作業員に指示して運転再開にまでこぎつけることは、私には疑いない。軍の司令部で、すなわち新街口の交通銀行で、我々はまた福田と出会った。現下の指揮官たち(Kommandanten)を訪問した際、彼は通訳として大いに我々の助けとなった。

我々は昨日、十二月十四日に、日本軍指揮官と連絡が取れなかったので、武装解除したシナ軍兵士の問題を明らかにするため、福田氏に次の手紙を渡した。

□添付資料 6

南京安全地帯国際委員会 南京寧海路五号

一九三七年十二月十五日

〔訳注、この手紙は(一)の一九三八年の『敵機』では十二月十五日の最後に添付されているが、(二)の一九四二年の『爆撃』では右の破線を付した「福田氏に次の手紙を渡した」という記述のあと独訳されてタイプうちされているので、理解の妨げにならないよう、以下にそれを記す。なお以下は富澤『南京安全地帯の記録』完訳と研究』、一四四頁より転載〕

拝啓 (Dear Sir)

南京安全地帯国際委員会は武器を投げ捨てた兵士たちの問題 (problem) で大変困っております (訳注、一九四二年の『爆撃』の独訳では「兵士たちの運命に実に狼狽しております」)。国際委員会は当初からこの地帯 (this zone) にシナ軍兵士が全くいないよう努力し、この点では十二月十三日曜日の午後まではかなり成功していましたが、十三日には兵士数百名が北側境界を通じて安全地帯に近づいて入って来たりして、私どもに助けてくれるよう訴えました。国際委員会は兵士たちに保護できないとはつきり言いました。しかし私どもは兵士たちがもし日本軍に対する一切の抵抗をやめて武器を捨てるなら、日本軍は温情ある扱いをしようと思つて言いました。

その夜の混乱と慌ただしさの中で、国際委員会は武装解除された兵士たちを一般市民から分離しておくことができませんでした。とりわけ兵士たちの中には軍服を脱ぎ捨てた者がいたからです。

国際委員会は兵士と確認された者たちを法的資格を満たした戦争捕虜 (lawful prisoners of war) であると完

全に認めるものです。しかしそれらの武装解除された兵士たちの取り扱いにおいて、国際委員会は日本軍が市民を巻き添えにすることなきよう最善の注意を払われるよう希望いたします。さらに日本軍が捕虜に関して認められている戦争法規に従い、また人道上の理由から寛大な処置をこれらの元兵士 (these former soldiers) にたいして取られるよう希望いたします。元兵士たちは労働者としてお使いになれば大変役立つでしょう、可能ならば喜んで市民生活に戻るでしょう。

委員長 ジョン・H・D・ラーベ

敬具

この書簡や十二月十四日付け指揮官への手紙にたいする回答として、今、福田氏に翻訳されて、次の覚え書きに記された回答を得た。

□添付資料7

「以下は富澤『南京安全地帯の記録』完訳と研究』、展転社、一四七頁より転載」

特務機関長との会見の覚書 (注、一九四二年の『爆撃』ではドイツ語訳)

一九三七年十二月十五日正午、交通銀行 (Bank of Communications) にて

通訳者、福田氏。

(会見は機関長の一方的言い渡しのみで、質問も議論もなかった。それは十二月十四日付けの私どもの手紙に対する回答であった。手紙はその日の朝、福田氏に託されて、特務機関長には日本語で提出されていた)

一、シナ軍兵士を求めて城内を搜索しなければならない。

- 二、安全地帯の入口には歩哨を立てる。
- 三、人々はできるだけ速やかに各自の自宅に戻るべきである。それゆえ我々は安全地帯を搜索せざるを得ない。
- 四、武装解除されたシナ軍兵士を取り扱うにあたっての日本軍の人的姿勢を信頼されよ。
- 五、警察は警棒は別としても武装してはいない限り安全地帯を巡回してよい。
- 六、貴委員会が安全地帯に貯蔵する米一万担（訳注、一担は約六十キログラム）は避難民のために使ってよい。しかし日本軍兵士も米を必要とするので、安全地帯では日本軍兵士が米を買うことは許容されるべきである。（安全地帯の外にある我々の貯蔵米についての回答は明確ではなかった）。
- 七、電話、電気、水道は復旧させねばならない。本日午後、ラーベ氏とともに視察し、それに応じて行動する。
- 八、我々は労務者を得たいと切望している。明日（訳注、十六日）から城内の清掃（to clear city）を始める。国際委員会にはご支援を願いたい。対価は支払う。明日は百名から二百名の労務者が欲しい。
- 九、米の貯蔵場所は視察し、警備する。

書記 ルイス・S・C・スマイス

同席した委員は

委員長 ラーベ氏

書記 スマイス博士

巡察長 シュペアリンク氏

指揮官や福田氏（訳注、一九四二年の『爆撃』で加筆）と別れようとしたとき、原田將軍（訳注、駐支武官原

田熊吉少将) が到着する。安全地帯 (die Safety Zone) を知りたいと直ぐ希望されるので、車で案内してまわる。午後は下関の発電所に行くことを約束したが、残念ながら午後はこの訪問者とは会い損なった。日本軍兵士の部隊が、我々の避難民——武器を捨てて我々の地帯 (unsere Zone) に逃げ込んでいた元兵士たち——の一部を連行しようとしていたからだ。私は、この人たちはもう戦わないとドイツ人として保証すると、それで彼らは解放された。

再び委員会の本部に戻るや一息つく間もなく、ボーイが悪い知らせをもってくる。日本軍が戻ってきて、今度は一三〇〇の避難民全員を拘束したというのだ。スマイスやミルズと一緒に、この人たちを解放しようとしたが無駄だった。避難民はおよそ一〇〇〇人の武装した日本軍兵士に取り囲まれて連行された。射殺される可能性が極めて高い。スマイスと私はもう一度福田のところに行く。この人たちのためにとりなしてもらうためだ。福田はできることはすると約束してくれたが、望み薄だ。この人たちが処刑されたら日本軍のために働く作業員を手配するにも難しくなると注意を促した。福田はそうとは認めるが、明日まで待つてくれと慰留する。実に見るに忍びない気分だ。この人たちが動物のように追い出されていくのを見るのは辛い。しかし済南のシナ軍は日本人捕虜二千人をも射殺したと言われる。

アメリカ大使館員が避難していた米軍の砲艦パネー号が日本軍に誤爆されて沈んだと日本海軍から聞く。乗船中の二名、イタリアのサンドリ (Sandri) 記者と梅平 (Maypin) 号の船長チャールソン (Charleston) が死んだ。米国大使館のバックストン (Paxton) は肩と膝を、スクワイア (Squire) は同じく肩を負傷した。ガシー (Gassie) は脚を折り、アンドリュース (Andrews) 少尉は重傷で、ヒュース (Hughes) 船長は脚を折った……。そんななか我が委員会にも負傷者が出た。クレーガーが殆ど空になったガンリンのドラム缶に裸火を持って近づきすぎ

たため、両手にやけどをしたのだ。クレイガーには大目玉を食らわせてやった。ヘンペルはホテルが日本軍に完全に破壊されたと訴えている。キースリングのコーヒー喫茶店もまたもう見る影もないようだ。この不確実性の時期が過ぎさえすれば私は嬉しい。実際南京陥落前よりも大きな不安のなかで皆生きてみんないる。爆弾や手榴弾にはもう慣れた。とにかく今は占領軍とうまくやっていくことが重要だ。それは一人一人の西欧人にはそんなに難しいことではないが、委員会の委員長ともなると確かにそう簡単には行きそうもない任務だ。

パネー号の生存者たちが今日の午後「米艦オアフ」号で下関にくることになっている。そのときまでに日本の艦隊も揚子江を航行できるかぎり下関に入港するそうだ。ここ南京では負傷者の収容はできないので、オアフ号はそのまま上海に航行するか航行できると思う。

次の写真は——どうも反ボルシエビキのプロバガンダのようだが——委員会の車の中で発見された。その出所は不明だ。

次の手紙で、我々は日本軍に改めて公式に我々の設立した赤十字支社への関心を向けさせる。

□添付資料 8

写真 (訳注、割愛)

「訳注、一枚目は「紀忠塔」の前で写真におさまるシナ風礼服装の男性三人。二枚目と三枚目は、レトニンの顔写真と思われる写真入り紙幣と「主席毛澤東」と印刷された「中華□□□塊共和国公債券」「中華蘇□□□共和国公債券」。四枚目は硬貨(表面は判読不能)。五枚目は頭骸骨を百個近く並べた写真」

〔比較と研究20〕

このように(一)の一九三九年の『敵機』に「傍線」を付した箇所、たとえば「その夜の混乱と慌ただしさの中で、国際委員会は武装解除された兵士たちを一般市民から分離しておくことができませんでした。とりわけ兵士たちの中には軍服を脱ぎ捨てた者がいたからです」などは(二)の一九四二年の『爆撃』にはあるが、(三)のヴィッケルト版では全て削除されている。従って(四)の邦訳版にもない。

〔比較と研究21〕

(一)の一九三九年の『敵機』に「読点」を付した箇所並びに添付資料7と添付資料8は(二)の一九四二年の『爆撃』で削除されている。従って「特務機、関長との会見の覚書」などは(三)のヴィッケルト版にも(四)の邦訳版にもない。なお添付資料8にかんする「次の写真……の出所は不明だ」という説明は、(二)の一九四二年の『爆撃』では削除されて、破線を付した「次の手紙で……赤十字支社への関心を向けさせる」に変更されている。

〔比較と研究22〕

(一)の一九三九年の『敵機』に「破線」を付した「北側境界を通つて」は(二)の一九四二年の『爆撃』で削除されている。そのため、いっどこからシナ軍正規兵が安全地帯に侵入してきたか、曖昧模糊となっている。

〔比較と研究23〕

本書四六二頁に「南京の電灯廠(訳注、発電所)や水道や電話の早期復旧は日本軍と我々の双方のためになる」とあるように、ラーベはシナ軍が破壊したことにたいして些かの不満も漏らしていない。批判されるべきは、清野作戦をおこなったシナ軍ではなかったのか。

〔比較と研究24〕

この十五日に収録された「特務機関長との会見の覚書」(Memorandum of Interview with Chief of Special Service Corps) は(二)の一九四二年の『爆撃』でも十五日に収録されているが、ただ「議事録」(Protokoll)と改題されて、ヴィッケルト版(S112)も邦訳版(一一三頁)もこれに従っている。「覚書」と「議事録」を比較してみると、覚書の「五、警察は警棒は別としても、武装して、い、ない、限、り」は議事録では「警棒の携帯も認めない」(邦訳版一一四頁)に、同じく日本軍が「九、米の貯蔵場所は視察し、警備する」は議事録では、国際委員会の権限内であることを主張するためか、全文削除されている。なお特務機関長の名前がないのである。

〔比較と研究25〕

本書四六六頁には、「この人たちはもう戦わないとドイツ人として保証すると、それで彼らは解放された」とあるが、本書の冒頭で指摘したようにシナ軍の攻撃は続いていた。十二月十五日午後八時半の金沢第七連隊作戦命令は「下士官兵のみで将校は認められない」と、将校の潜伏を指摘している。同連隊第一中隊の水谷莊一等兵が十二月十五日の陣中日記に書いているように、「おびただ夥しい残敵が便衣をまとって好機を狙っているのかも知れない」というのが、実態に即した戦場心理であった。

〔比較と研究26〕

陥落二日目の十五日にはズラリと出店が街角に並ぶ城内で、「家から出ようとする者など今や一人もいない」(本書四七一頁)ほど「大きな不安のなか」(本書四六七頁)で人々は生きていたのであろうか。

received 16/12/37
976 am

Herr Rabe,

Hiermit nach dem Befehl Seelige ich
Ihnen mit, daß die Macht heute vormittags
von 9 Uhr an in dem sogenannten „happy zone“
die regulären Soldaten untersuchen werden“

Manking Tokumukikan
K. Kikuchi

1001-1001-3-28-15-15
又字15-15-15

發 文 稿 紙 字 第 號 年 月 日

左下に印刷された「發文稿紙」は日本語なのか、中国語なのか。諸橋轍次『大漢和辞典』第二巻の「発」を見ても「發文」はない。しかし「稿紙」とは同第八巻の「稿」を見ると「下書き草稿」（二五二一八頁）とある。もし「發文稿紙」が中国語であったとすれば、キクチ氏は中国軍の公用便箋をどのように入手し、どうしてそれに記入したのか。欄外の手書きは「received 16 / 12 / 37 8 □ am」（三七年十二月十六日八時四五分受領）となっているが、不思議なことに、必ず記入されるべき年月日の記入がない通告であった。なお訳については本書一五六頁の添付資料10を参照のこと。

十二月十六日

午前八時四十五分、キクチ氏の書簡を受け取る。彼は実に謙虚で親切な日本人通訳者 (interpreter) だ。それによれば、「本日午前九時から所謂 (安全地帯) で兵士の搜索が行われる」ということだ。これまで経験してきた爆撃機や砲撃など、これからここで耐えねばならない現下の恐怖の時期からすれば大したことではない。安全地帯の外では掠奪にあわなかつた店など一つもない。掠奪、強姦、殺人、傷害致死が今や安全地帯の中でも始まっている。空家は外国旗があるうがなかるうが、どこもこじあけられ掠奪された。今ここを支配している状況は添付の福田氏宛の手紙からだいたい想像できよう。そこに挙げた十五の事例は我々が知り得た事例の氷山の一角ではないのである。

ドイツ軍事顧問団の家は大抵が日本軍兵士に略奪されている。家から出ようとする者など今や一人もいない！ 車を通すため私の家の庭の門を開けると (私は百人以上の極貧の避難民を収容しているのだが) 外にいる女子供が殺到してくる。膝を屈して、頭を地に打ち付けて、私の庭でキャンピングする許しを得たいと言う。それも追いつき、さざるを得ない。もう空気が全然ないのだ。その悲惨さとはかく想像を絶する。

下関へキクチと車を走らせた。電灯廠 (発電所) と米の在庫量を視察する。電灯廠は見たところ無傷で、作業員が日本軍の保護に身を委ねるならば数日で再稼働できそうだ。私は手伝う用意はあるが、規律のない日本軍の信じ難い行動では、四十人から四十五人の作業員を呼び集められるか、望み薄だ。この状況下で日本軍当局を通じてドイツ人技師を、あえて上海から呼び寄せようとも思わない。

今しがた聞いたところでは、またもや数百人の武装解除された兵士が銃殺されるために私たちの地帯から (aus unserer Zone) 連行された。その中には私たちの警官の五十人がいて、兵士を安全地帯に入れたということで銃

殺刑になるそうだ。

下関へと通じる大通りの中山北路は死体が一面に広がり、破壊された軍装品で覆われている。交通部はシナ軍が放火し、挹江門は砲撃で破壊されている。門の前は死体の山だ。日本軍は死体を前にしながら何ももしない。その処理は我々の下部組織である紅卍字会にも禁じられている。ひよっとすると武装解除された兵士を殺す前に彼らに片づけさせるのだろう。我々欧米人は皆、恐怖のあまり全身の力が抜ける。処刑は申し立てによれば軍政部の向かいのバラックで（機関銃で）なされているそうだ。（訳注、一九四二年の『爆撃』では、「処刑は至る所で起きている、一部は機関銃で軍政部の向かい側のバラックで」）

岡崎勝男総領事が今日の夕方訪問してきて説明するには、兵士たちの何人かは確かに銃殺されているが、残りには揚子江の中の島の強制収容所（Konzentrationslager）に収容されているという。

以前我々の学校の用務員であった男は撃たれて鼓樓医院（注、南京大学病院）にいる。労働を強制されて、労働の紙切れを受け取ってから、ドイツ大使館の旅券（私の目の前に血に染まってある）を提示すると二度発砲された。鼓樓医院のマツカラム氏の報告が一五三頁（本書四八五頁）にある。

これを書いている時も、日本軍の兵士たちの拳が我が家の庭の裏戸をがんがん叩いている。ボーイが開けないから、この人たちの頭が塀の上に現れる。私が携帯サーチライトを手に飛び出すと、こっそりと大急ぎで逃げる。正門を開けて、跡を追うのだが、もう三日間もどぶに死体が幾つも横たわる照明のない暗い路地へと消えていくのだ。吐き気で身震いがする。多くの女子供が恐怖で目を丸くして、互いに身を寄せ合い、体を温め、相互に励ましながら、無言で庭の草に蹲すまっている。この人たちに望みがあるとすれば、「外国の悪魔」の私がこの悪霊（die bösen Geister）を追おひひくことなのだ！

前述の日本総領事岡崎勝男氏が本日訪問した際、特に気づかされたことがあった。日本軍は確かに我々の委員会を承認してはいないが、あたかも承認しているかのように扱っている。そういうことから我々は、我々を交渉のために大使館に迎え入れてくれた福井淳氏気付けで、次の書簡を大使館宛てに出した。

□添付資料9

「以下は富澤『南京安全地帯の記録』完訳と研究』、一四六頁より転載」

日本大使館専門担当官

一九三七年十二月十五日

南京寧海路 国際赤十字社南京支社

福田篤泰殿

拝啓 (Sir)

南京では負傷した兵士や一般市民が多いため、私どもはこの情勢に対処するため国際赤十字会の地方支部を設立いたしました。私どもは上海の国際赤十字会と中国の紅十字会からの承認を求めています。そして今、この人道的業務を遂行する許可を南京の日本軍当局から得て頂くよう、貴大使館にお願いする次第です。ここに私どもの国際委員会の名簿を同封いたします。

敬具

書記 アーネスト・H・フォースター

□添付資料10

ラーベ様

本日午前9時から、軍はいわゆる安全地帯において正規兵を搜索することを、ここに命令によりお伝えする。

南京特務機関K・キクチ

□添付資料11

〔以下は富澤『南京安全地帯の記録』完訳と研究』、一四八頁より転載〕

日本大使館専門担当官福田篤泰殿

南京安全地帯国際委員会

一九三七年十二月十六日

拝啓 (My dear Sir)

昨日正午あなた方と一緒に交通銀行で会見した時に、貴軍の少佐の方がご指摘のように、城内をできるだけ早く正常な生活にもどすことが得策であります。しかし昨日は、安全地帯で秩序攪乱行為 (distorders) が続いたため、避難民の間にパニック状態が広がってしまいました。大きな建物にいる避難民たちはお粥を貰いに近くの炊き出し所に行くことすら怖れています。その結果、私たちは直接米をそのような建物 (compounds) に配達せざるを得ず、それが問題を複雑にしています。苦力を確保して米と石炭を積み込んでお粥炊き出し所に運ぶということすらできず、そのため今朝は数千の人々が朝食なしでいなければなりません。国際委員会の外国人メンバーたちはこれらの一般市民が食事できるよう今朝日本軍巡察隊を通してトラックを手に入

れようとしたが、絶望的でした。昨日、国際委員会の外人メンバーたちは家用車を数回日本兵に取り上げられそうになりました。(不法行為の事例の一覧表を添付しております)。

こんなパニック状態が収まらないかぎり電話作業員、電気工事作業員、恐らくは水道工事作業員の確保、各種商店の開店、道路の清掃など正常な活動を南京で始めることは不可能でしょう。

この状況を速やかに改善するため、国際委員会は日本帝国陸軍が以下の措置を直ちに講じられることを謹んで提案します。

一、搜索は全て責任ある将校のもと正式に組織された部隊により行われること(トラブルの殆どは将校のいない三、四人のうろつく兵士たち起因しています)。

二、夜間は、そして可能ならば日中も、安全地帯の入口の全てに歩哨(昨日少佐が提案)を立て、はぐれ日本兵が一人も安全地帯に入ることのないようにすること。

三、本日、我々に通行証を下付してください。家用車とトラックの前面ガラスに貼り付け、日本軍兵士に徴発されないようにするためです(シナ軍総司令部は南京防衛の重圧のもとですら、このような通行証を発給しました。また私たちが通行証を得る前に徴発された車は全て私たちがその事件を通報してから二十四時間以内に国際委員会に返還されました。さらにまた、あの困難な状況のもとにあってもシナ軍は一般市民が食べる米の運搬に使う三台のトラックを私たちに割り当てました。確かに、日本帝国陸軍は南京を完全に掌握し、戦闘も終息し、装備も遥かに大量に有しているのですから、現在日本軍の保護下に入っているシナ人一般市民に対する配慮がシナ軍時代よりも低下することなど考えられません)。

私どもが昨日(注、十五日)抗議するのを控えましたのは、最高司令官が到着すれば秩序は回復すると思っ

たからでしたが、昨夜は一昨晚よりさらに状況が悪化しましたので、日本帝国陸軍はその兵士たちのあのような行為を決して許す筈がないと確信していますので、このような事態に対しては注意を喚起せざるを得ないと考えた次第であります。

敬具

代表 ジョン・ラーベ（記名のみ）

事務局長 ルイス・S・C・スマイス（自署）

□添付資料12

「以下は富澤『南京安全地帯の記録』完訳と研究』、一五一頁より転載」

一九三七年十二月十六日提出

「原注」以下は私どもが綿密に調べる時間が持てた事例に過ぎず、私ども担当者にはもつと多くの事例が報告されています。

第一件 十二月十五日、日本軍の兵士たちによって安全地帯衛生委員会（Sanitary Commission）第二区の道路清掃員六名が彼らが住んでいた鼓樓の家屋内で殺され、一名は銃剣で重傷を負った。彼らは私どもの従業員であつて、殺傷の理由は一切不明。兵士たちはその家に侵入したのです。

第二件 十二月十五日午後四時、金陵女子大の門の近くで米を積んだ荷車一両が日本軍兵士たちに奪われた。

第三件 十二月十四日夜、第二分区（sub-division）の住人数名が各家庭から追ひ立てられ、一切合切奪わ

れてしまった。その分区の長は彼自身日本軍の兵士たちに二度も掠奪された。

第四件 昨十二月十五日夜、日本兵七名が南京大学図書館に入りこみ、シナ人女性避難民七名を捕まえて、内三名はその場で犯された(本件の詳細は追って南京大学緊急事態委員会委員長 M・S・ベイツ博士が提出)。

第五件 十二月十四日夜、日本兵がシナ人の家に侵入し、女性を犯したり、拉致したりする例が数多くあったので、その一帯にパニックが起こり、昨日女性数百人が金陵女子学院内に移ってきた。そのため昨晩はアメリカ人男性三名が同学院内で一夜を過ごし、構内にいた婦女子三千名の保護に当たった。

第六件 十二月十四日、はっきりした統率者なしの日本兵約三十名が大病院と看護寮を搜索した。病院の職員は徹底的に掠奪された。取られたのは万年筆六本、金百八十ドル、時計四、病院包帯二、懐中電灯二、手袋二組、セーター一であった。

第七件 昨十二月十五日、日本軍の兵士たちがやって来て避難民たちから数回にわたり掠奪をしていると、公共施設にある避難民収容所の全てから報告してきた。

第八件 十二月十五日、アメリカ大使 (American Ambassador) の公邸が押し入れられ、小物が多少奪われた。

第九件 十二月十五日、日本軍の兵士たちが裏扉を乗り越え扉を押し破って金陵女子学院の教員住宅に侵入した。十二月十三日以降、動かせる物は全部建物から運び出されていたので、何一つ盗ることはできなかった。

第十件 十二月十四日正午、金銀巷 (Chien Ying Hsiang) で日本軍の兵士たちがある住宅に侵入して少女四名を拉致し、犯した上で二時間後に帰らせた。

第十一件 十二月十五日午後、日本軍の兵士たちが当委員会の寧海路米穀店を訪ね、米三袋 (三、七五担) を買って五ドルしか払わなかった。定価は担九ドルなので、日本帝国陸軍は国際委員会に二十八ドル七十五セ

ントの借りがあることになる。

第十二件 十二月十四日夜十時、日本兵十一名が金銀巷のシナ人の家に侵入し、シナ人女性四名を犯した。

第十三件 十二月十四日、日本軍の兵士たちがアメリカ人宣教師グレイス・バウアー嬢の家に侵入し、毛皮の手袋一組を奪い、食卓にあった牛乳を飲みつくし、砂糖を手で掬って行った。

第十四件 十二月十五日、日本軍の兵士たちが双龍巷 (Shuan Lung Hsiang) 十一号にある R・F・ブラディ博士 Dr・R・F・Brady (米国人) の車庫に侵入、博士のフォード V8 の窓一つを叩き壊した後、機械工を連れて戻り、車を発進させようとした。

第十五件 昨十二月十五日夜、日本軍の兵士たちが漢口路 (Hankow Road) にあるシナ人家庭に侵入し、若妻一人を犯し、女性三名を拉致した。夫二名が追ったところ、兵士たちは二名を撃った。

これらの事例は国際委員会の外国人委員または職員により確認済みであります。

事務局長 ルイス・S・C・スマイス (自署)

□添付資料 13

「以下は富澤『南京安全地帯の記録』完訳と研究』一四六頁より転載」

日本大使館専門担当官 (attache) 福田篤泰殿

一九三七年十二月十五日

拝啓 (Dir、訳注、キーボード上の D と S の打ち間違えとすれば Sir か)

南京では負傷した兵士や一般市民が多いため、私どもはこの情勢に対処するため国際赤十字会の地方支部を

設立いたしました。

私どもは上海の国際赤十字社と中国の紅十字会からの承認を求めています。

そして今、私どもは、この人道的な業務を遂行する許可を南京の日本軍当局から得て頂くよう、貴大使館にお願いする次第であります。

ここに私どもの委員会の会員名簿を同封いたします。

敬具

アーネスト H・フォースター

書記 (原注)

原注 国際赤十字委員会

□添付資料 14

南京、日本大使館将校に、(To the Officers of the Japanese Embassy, Nanking)

南京、莫愁路六十五、
一九三七年十二月十七日

拜啓 (Gentlemen)

次のことを通知させていただきます。本日フーバート・L・ソーン (Some) 師と共に偶々アメリカ大使館を通つた時、ちょうど数名の日本軍兵士が大使館の車庫から数台の車を出そうとしていました。貴軍当局はこの種の行為をすぐに止めさせたいと願っていると確信していますので、ここに取り急ぎお知らせします。

W・P・ミルズ (自署) 敬具

□添付資料15

南京日本大使館

南京、南京大学
一九三七年十二月十六日

拝啓 (Gentlemen)

失礼ながら非公式に、貴大使館の建物に隣接する大学の資産の秩序と全般的安寧の問題について取り上げたい。私たちは皆、帝国陸軍は通常の市民に害を与えることを望んでいないという日本軍将校の公式声明を聞いて、貴当局の満足するいかなる政府のもとであつても平和な生活に復帰するのは困難でないと信じています。しかしちょうど今は人々の苦難と恐怖が実に大きいのです。次の事例は貴大使館の建物に近い我が大学所有地からのものです。その他にも多くのことが、我々の病院、中学校、農村指導者養成所で発生しております。

(1) 十二月十四日。兵士が小桃園の金大(訳注、南京大学)農園試験場(Agricultural Economics Compound)の正門にある米国旗や米国大使館の公告を破り、そこに(注、金大宿舍か)住む数人の教師や助手から略奪し、解錠を待たずに幾つかの扉を壊しました。

(2) 十二月十五日。上記の場所に兵士たちが何度か来て、安全を求めて来ていた避難民から金品を取り上げ、女性たちを連れ去りました。

(3) 十二月十五日。本学の新図書館では一五〇〇名の普通の人々を世話していますが、四名の女性が大学の所有地で強姦され、二名が拉致され強姦された後で解放されました。三人が連れ去られたまま戻らず、一人は連れ去られたが貴大使館近くで貴軍の憲兵によって解放されました。こういった兵士の行為は、これらの家族や、近隣の人々、そして南京の全てのシナ人に大きな苦痛と恐怖をもたらしています。安全地帯の他の場所からも一〇〇件以上の類似の事例が今朝私のところには報告されています。こういうことは私の現在の任務ではありませんが、貴館の隣の大学の問題は兵士たちが引き起している強盗や強姦という大きな苦難の一例ではないことを示すために話しております。

私たちが真剣に望んでいるのは、軍隊に規律が回復されることです。今は恐怖が実に大きいので人々は食料をもらうことすら嫌がつており、通常の生活も仕事も不可能です。私たちは貴当局が直接将校の指示のもと適切な査察を規律正しく実施するよう取り決めるべきだと謹んで主張します。徘徊する兵士たちの一団が一日に十回も同じ場所に入つて、人々から食料や金をごっそり盗んでいるのです。そして次に、南京の家族が兵士の暴力から守られるべきだと主張します。それは日本軍と日本帝国の名声のためです。日本軍当局とシナの普通の人々との良き関係のためです。あなたが妻や妹や娘を思うあなた自身の思いやりのためです。

シナ軍の無秩序や敗退は、日本軍が人々の信頼を確実にするよいチャンスとなっておりませんが、そのチャンスが通常の人間の幸福や道義にたいする無関心や遅れによって失われるならば、関係者すべてにとつて不幸なことです。

敬具

南京大學緊急事態委員会委員長 M・S・ベイツ (自署)

□添付資料16

南京日本大使館

南京、南京大学、一九三七年十二月十六日

拝啓 (Gentlemen)

今朝あなたがたに送付した手紙の第二項にかんして簡単な注釈を付けさせていただきます。私どもの金大農園試験場（小桃園）では、昨晚、大人数で繰り返しやつてきた兵士たちに三十人以上の女性が強姦されました。私はこの問題を徹底的に調査して、この声明は正しいと思っております。

この状況は南京のこの区画のどこにあつても実に哀れなものです。あなたがたは軍事力において優越を誇示しましたので、慈悲においてもそうするものと私たちは信じています。生命と身体の安全がこれら数万の平和的な人々には直ちに必要なのです。

大学は安全地帯にありますので、この地帯の状況や問題に影響されず。将校の中にはこの地帯の目的と活動に好意的で理解ある人もいますが、無慈悲で邪推的な人もいます。この人々には、国際委員会が行つてきたことが初めから完全にオープンであることが明らかになるでしょう。事務所も建物も行動も全てが査察に日々開かれています。委員会は正常な状態が回復されることを喜び、人道上の責任から離れます。その時まで、大いなる困難のもと、食糧と住居を、戦争により家から追い出され今なお大いなる不安の中で生活している人々に提供するよう努力するのみです。

敬具

南京、大学緊急事態委員会委員長 M・S・ベイツ (自署)

□添付資料17

南京日本大使館將校 (Officers of the Japanese Embassy, Nanking)

一九三七年十二月十七日

拝啓 (Gentlemen)

恐怖と蛮行が貴館から良く見えるところで、また貴館の近隣で、はびこり続けています。

(1) 昨晚、兵士たちが多勢の避難民のいる本学図書館の建物に繰り返しやってきては、銃剣を突きつけてお金や時計や女性を要求しました。たいてい彼らは過去二日にわたって何回も略奪にあつてゐるため時計やお金がなく、兵士たちは近くの窓を破り、手荒く彼らを扱いました。こうして私たちのスタッフの一人は銃剣で傷を負いました。

(2) 昨晚、本学図書館の建物では、城内のこの地区の多くの場所においてと同じく、兵士たちは女性数人を強姦しました。

(3) 兵士は非武装の我が警備員を殴りました。警備員が兵士たちに少女たちを提供しなかつたからです。

(4) 昨晚、我々米国人所有の住宅は、国旗と大使館の布告を出しているのに、うるつき回る兵士たちの群れに不法にも侵入されました。数回という家もありました。その中には私たちのスタッフ三人の住んでゐる家も含まれていました。

これらの行為は南京の大多数の住宅で起きていることの氷山の一角であり、外国人財産の保護と同じくシナの安寧にも最善を尽くすという貴政府の公式声明と比較してもらいたいと謹んで願っております。

私たちには私事を強調するつもりはなく、ただ無統制の兵士たちの無頼ぶりを示したいためあと二つの事

件を引き合いに出します。昨日、私たちのスタッフのアメリカ人が将校から、調査もないまま全く無実の罪で、そして兵士たちからも、殴られました。その夜は別のアメリカ人と私自身が、ライフルをもった酔っぱらいの兵士により、ベッドから引ずり下ろされました。

この手紙は大学のために何か特別の保護をとお願いするのではなく、大学が貴館と接近しているため、すべての平和的な人々に危険が切迫していると強調するために書いています。

日本陸軍には、尊敬するに足る行為を維持し、征服された人々に良き秩序のもとに働いて生活する機会を与えるだけの、力と処理能力があると信じます。なぜ日本陸軍はそうしないのか、現地の人々と日本の名誉にたいして前にも増してそうするのか、理解することができません。

敬具

南京大学緊急事態委員会委員長、M・S・ベイツ（自署）

□添付資料 18

南京日本大使館職員に (To the officers of the Japanese Embassy, Nanking)

拜啓 (Gentlemen)

莫愁路五十四号と六十五号、そして天妃巷、*Tien Fei Hsiang* と *Hua Chia Hsiang* の長老会伝道団の所有地が日本軍部隊に侵入されたことに注意を喚起させていただきます。資産が被害にあい、盗まれた物品もあります。更に、天妃巷の敷地では二人の若いシナ人少女が昨日強姦されたことにも注目してください。上記の場所には米国旗と米国大使館の布告がはっきりとわかるように表示されており、日本陸軍の保護を受ける資格があります。かかる

不幸な事件が再発しないよう、この問題に貴軍当局はご親切にも注意を向けてくださいますよう。

敬具

W・P・ミルズ (自署)

□添付資料20

□□□□□□

この王裕慧 (Wang Yu Hwei) と、Fu Kan 六号の (ドイツ人の) Ho Tzon tgi chi liang ho kung sz の男の報告によれば、十五日の午前八時頃、数名の日本軍兵士が彼らのところにやってきた。彼は捕えられて、ドイツ語の登録証明書 (Chih Chiao) を提示しても、彼らはそれを地面に投げ捨てた。彼らはそこに飾られていたドイツ国旗を裂いたとも、彼は主張している。彼は積み荷を□□□□ (Chung Kuan Shotoh Shao) まで運ぶために徴用されたあと解放され、作業をしたという紙片を与えられた。家に帰る途中の九江 (Kiu Kiang) 路上で何の理由もなく別の日本軍兵士が兵士たちに二度も後から撃たれた。彼は今鼓楼病院に入っていて、インタビュはそこでできよう。

(鼓楼病院、マネージャの、マッカラム、夫妻による報告、161237——訳注、ラーベ筆跡の手書きイニシアル)

□添付資料20

南京の西洋人、

一九三七年十二月十六日、

名前、

国籍、

組織、

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------------|--------------|------------|-----------|------------|----------------|------------|----------------|-----------|-------------|-----------|-------------|-----------|-------|-------------|----------------|----------------|----------|
| 18、 | 17、 | 16、 | 15、 | 14、 | 13、 | 12、 | 11、 | 10、 | 9、 | 8、 | 7、 | 6、 | 5、 | 4、 | 3、 | 2、 | 1、 |
| W・P・ミルズ師 | ミ、ニト・ヴォートリン嬢 | マツカラム師 | アイバ・ハインズ嬢 | グレイス・パウアー嬢 | ロバート・O・ウイルソン博士 | C・S・トリマー博士 | ルイス・S・C・スマイス博士 | M・S・ベイツ博士 | チャールズ・リッゲズ氏 | ツァイス氏 | コトラ・ポトシワロフ氏 | ハツツ氏 | ヘンベル氏 | タオシツヒ氏 | エドアルト・シユペアリンク氏 | クリステイアン・クレトガト氏 | ジョン・ラトベ氏 |
| アメリカ | アメリカ | アメリカ | アメリカ | アメリカ | アメリカ | アメリカ | アメリカ | アメリカ | アメリカ | 白ロシア | 白ロシア | オーストリア | ドイツ | オーストリア | ドイツ | ドイツ | ドイツ |
| 北部長老派教会伝道団 | 金陵女子大 | キリスト教連合伝道団 | 大学病院 | 大学病院 | 大学病院 | 大学病院 | 南京大學 | 南京大學 | 南京大學 | 安全地帯機械技術者 | サンドグレンス電器店 | 安全地帯機械技術者 | 北ホテル | キースリング&バーダー | 上海保險 | カルロヴェイツ | ジトメンス |

19、	フ、ト、ベルト・ソ、ン、氏	ア、メ、リ、カ	南、京、神、学、院
20、	ジ、ョ、ー、ジ・フ、イ、ツ、チ、氏	ア、メ、リ、カ	Y、M、C、A
21、	ア、ー、ネ、スト・H・フ、ォ、ト、ス、タ、ー、師	ア、メ、リ、カ	ア、メ、リ、カ、聖、公、会、伝、道、団
22、	ジ、ョ、ン・マ、ギ、ー、師	ア、メ、リ、カ	ア、メ、リ、カ、聖、公、会、伝、道、団

〔比較と研究27〕

このように(二)の一九三九年の『敵機』に「傍線」を付した箇所は(二)の一九四二年の『爆撃』にはあるが、(三)のヴィッケルト版では全て削除されている。従って(四)の邦訳版にもない。

(二)の一九三九年の『敵機』に「読点」を付した箇所は(二)の一九四二年の『爆撃』で削除されている。従って(三)のヴィッケルト版にも(四)の邦訳版にもない。

〔比較と研究28〕

他方(二)の一九三九年の『敵機』に「破線」「読点」を付した箇所について一つずつ加筆削除の結果を記すと次のようになる。

□(二)の一九三九年の『敵機』十六日に「破線」を付した「ドイツ軍事」は、実は『敵機』にはなく、(二)の一九四二年の『爆撃』で加筆されている。

□「破線プラス句点」を付した、家から出ようとする「者」は、(三)のヴィッケルト版で「シナ人」とされている。

□「読点」を付した「それも追い返さざるを得ない。もう空気が全然ないのだ」は、(二)の一九四二年の『爆撃』

で削除されている。

□「下関へ通じる中山北路」は(一)の『爆撃』にはあるが、(二)のヴィッケルト版が単に「下関への道」(邦訳版では一二二頁、Die Strasse nach Hsiakwan)に改変している。

□「一部機銃を使って行われているらしい」は、(二)の一九四二年の『爆撃』では「らしき」(angeblich)ではなく「至る所で」(überall)に改変されている。推測ではなく事実としての広範囲の出来事という記述が(三)のヴィッケルト版にも(四)の邦訳版(一二二頁)にも踏襲されている。

□「破線」を付した「二度発砲された」は「添付資料19 マツカラム鼓樓医院の報告」に基づいているが、(二)の一九四二年の『爆撃』では「家に帰る途中何の理由もなく背中を二度撃たれた」と改変されている。(三)のヴィッケルト版も(四)の邦訳版(一二二頁)もそれに基づいている。

□「これを書いている時も」で始まる段落の「兵士たち」には、(二)の一九四二年の『爆撃』で「日本軍の」が加筆され、同じく「悪魔」には「外国人の」と加筆されている。

□この十六日の最後の段落は「前述の日本総領事岡崎勝男氏」が始まるが、これは(一)の一九三九年の「敵機」ではなく、(二)の一九四二年の「爆撃」で加筆されている。しかし(三)のヴィッケルト版はこれを削除しているため、(四)の邦訳版にもない。

□この添付資料12は(一)の『敵機』の十二月十六日に収録されているが、(二)の『爆撃』では十二月十五日の件に移されている。しかしヴィッケルト版で削除されたため、邦訳版にもない。なお添付資料12の最後に「ここに私どもの委員会名簿を同封いたします」と結ばれている名簿は添付されていない。添付されているのは「南京の西洋人のリスト」であった。なお、「南京国際赤十字委員会名簿」は十二月十三日に収録されている。

〔比較と研究29〕

「十二月十六日……キクチ氏の書簡……によれば、(本日午前九時から所謂「安全地帯」で兵士の搜索が行われる)」というのは、金沢第七連隊が十二月十四日から安全地帯に搜索に入ったという事実と合致しない。

そのためかどうか、(一)の一九三九年の『敵機』に収録されたキクチ氏の手書きメモは(二)の一九四二年の『爆撃』で削除されている。従って(三)のヴィッケルト版にも(四)の邦訳版にもない。

〔比較と研究30〕

本書四七一頁にある「ドイツ軍事顧問団の家は大抵が日本軍兵士に略奪されている」というのが事実であったとしても、ドイツ軍事顧問団の家の所在地を知らない日本軍兵士にとって、いったいどうすれば顧問団の家を探し当てて、その殆どの家を略奪できたのであろうか。

〔比較と研究31〕

添付資料11の南京安全地帯国際委員会の福田篤泰宛て書簡は(二)の『爆撃』にもあるが、傍線を付した箇所のみは(三)のヴィッケルト版が削除しているため、(四)の邦訳版にもない。一方、その書簡のなかの「外国人メンバーたちは自家用車を数回日本兵に取り上げられそうになりました」は、(二)の一九四二年の『爆撃』では「取り上げられた」という独訳によって既成事実化され、邦訳版(二二〇頁)もそれに準じている。

〔比較と研究32〕

本書四七一頁に、「下関へと通じる大通りの中山北路は死体が一面に広がり」と記され、それに続いて「挹江門は砲撃で破壊されている。門の前は死体の山だ」とあるが、その事実は確認できない。

〔比較と研究33〕

一九三九年の『敵機』は、「処刑は申し立てによれば軍政部の向かいのバラックで（機関銃で）なされているそうだ」（本書四七二頁）という伝聞の形で記しているが、一九四二年の『爆撃』では「処刑は至る所で起きている、一部は機関銃で軍政部の向かい側のバラックで」（Die Hinrichtungen finden überall statt – zum Teil mit Maschinengewehren bei den Baracken gegenüber vom Kriegsministerium.）という事実として記されている。それがヴィッケルト版と邦訳版（一一二頁）に踏襲されている。

〔比較と研究34〕

本書四七二頁の「以前我々の学校の用務員であった男は撃たれて鼓楼医院（注、南京大学病院）にいる」というその男は、「鼓楼病院の患者に関するメモ」（二二八頁）に確認することができない。

〔追記〕

本稿に『南京安全地帯の記録』完訳と研究』からの引用をご快諾いただいた富沢繁信氏と展転社、ならびに関口鉦造元海軍中佐の板倉由明氏宛て私信の転載をご快諾いただいた関口鉄也氏と恵子氏に、深甚の謝意を表します。

[KADOVAMA Eisaku & HIGASHINAKANO Shudo, A Comparative Study on the Discrepancies between John RABE's Manuscripts and Published "Diaries" (5), *Asia University Law Review*, vol. 52, no.2, January 2018.]